

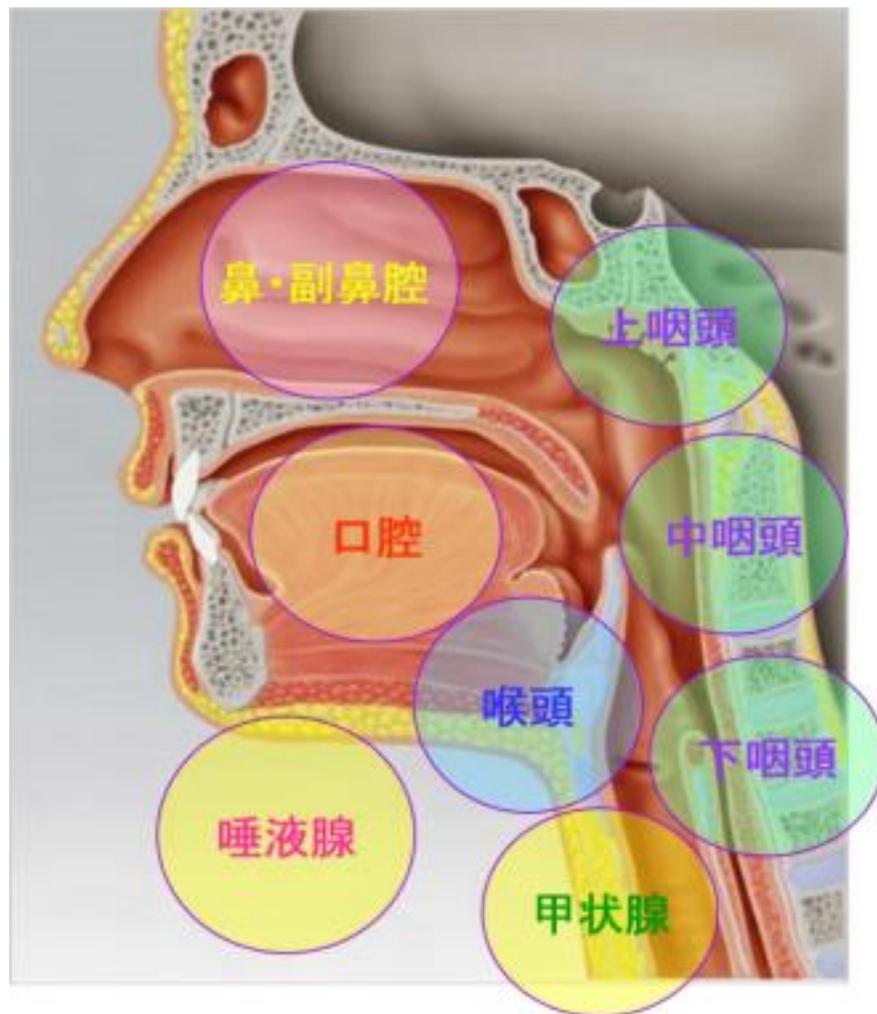
当院における頭頸部癌の 診断と治療

耳鼻咽喉科・頭頸部外科
福増 一郎

頭頸部がん

- 全がんの4~5%
- 90%以上が扁平上皮癌
- 男性に多い
- 危険因子 70%が飲酒、喫煙
HPV(ヒトパピローマウイルス)

頭頸部がんが発生する部位



- * 呼吸
- * 発声
- * 摂食・嚥下

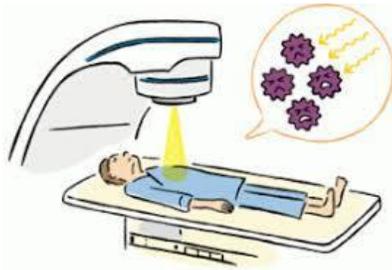
治療



• 手術

利点:がんを取り去ることができる

欠点:大きく切除するほど機能が失われる



• 放射線

利点:形態を温存できる

欠点:口渇などの永続、嚥下障害、放射線誘発癌



• 抗がん剤

主に手術や放射線と組み合わせて使う

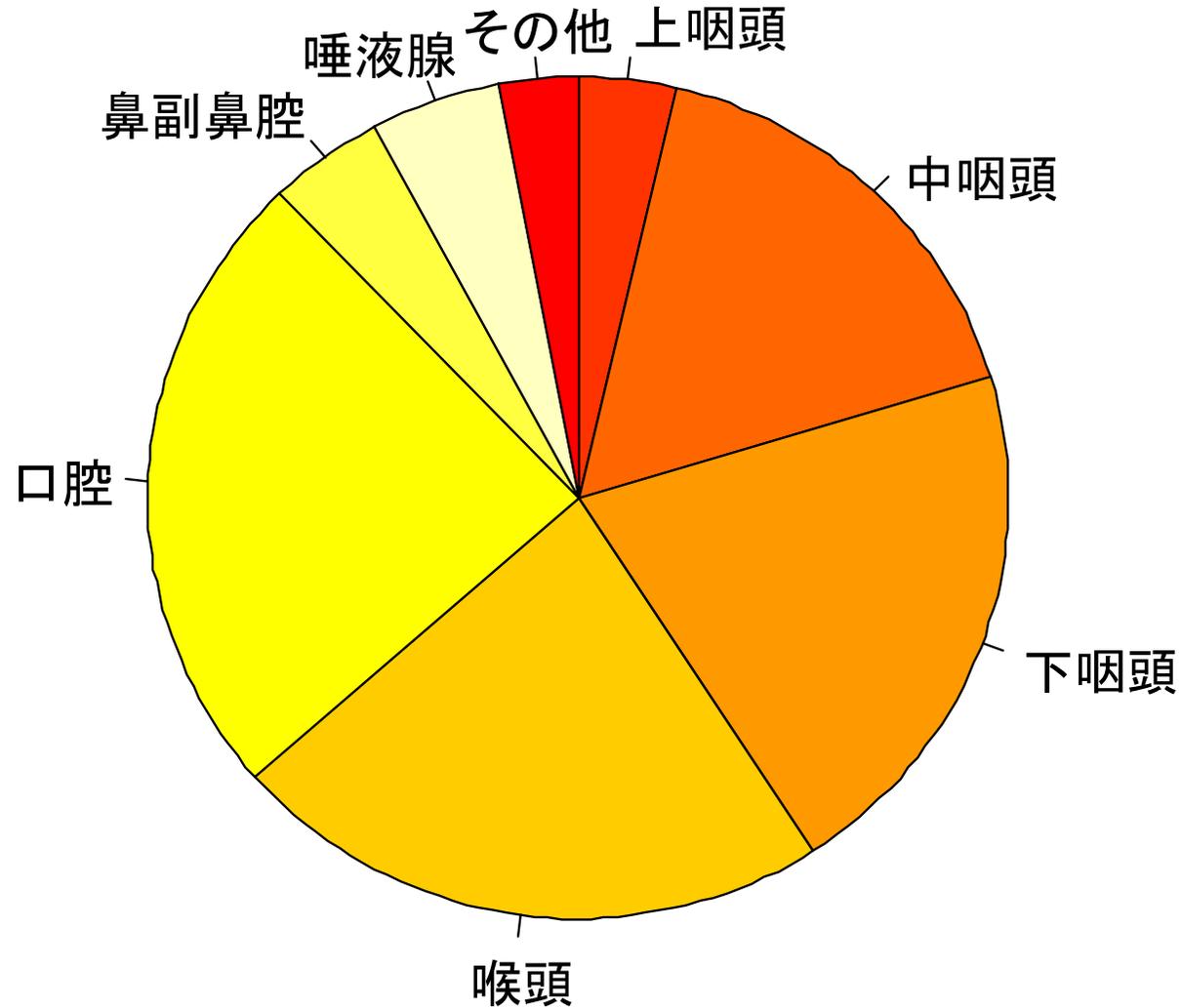
• 免疫チェックポイント阻害剤

再発、転移症例に2017年4月より保険適応

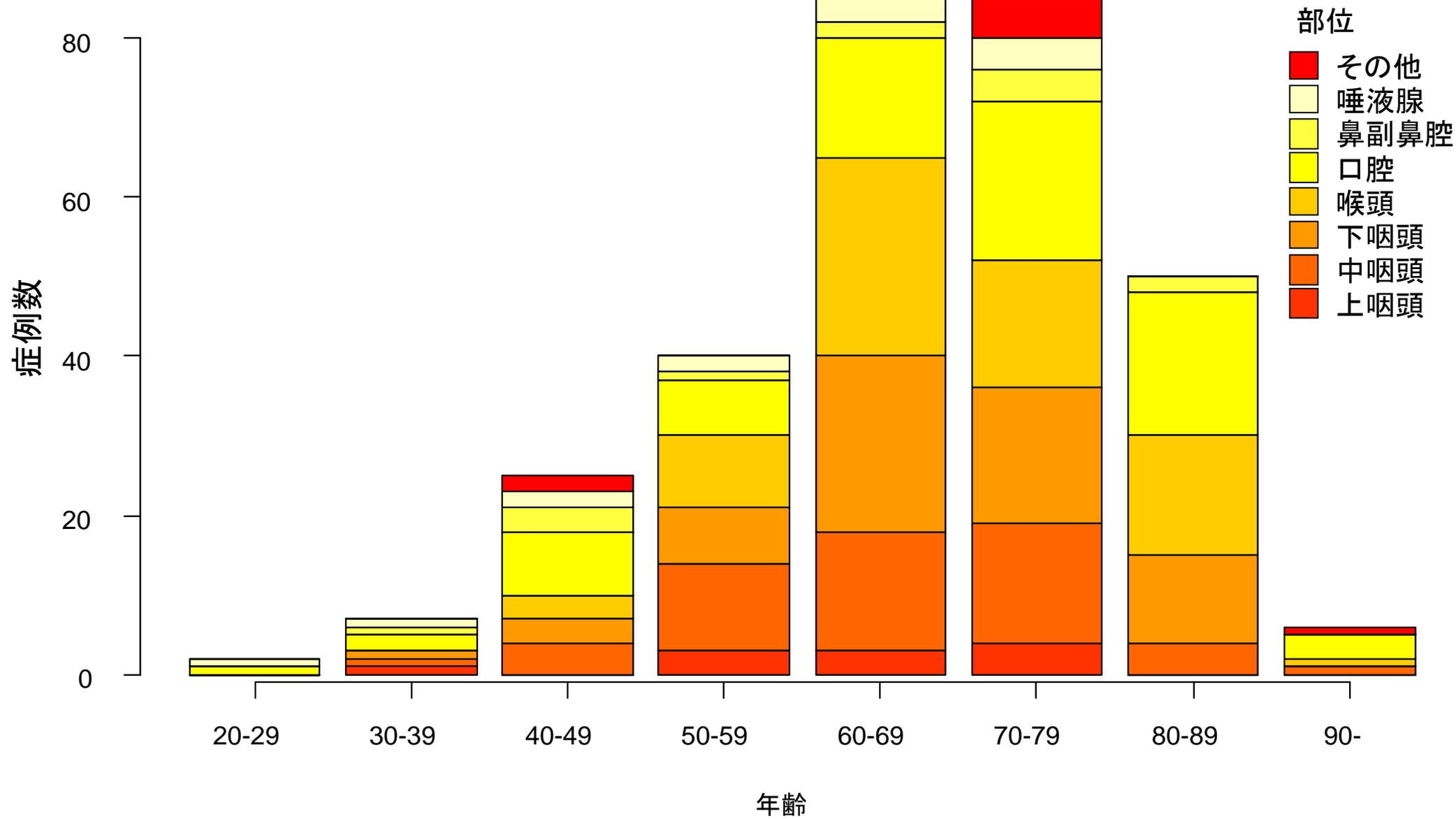
当院での症例

(2013年1月～2017年12月)

発生部位



	男性	女性	計
上咽頭	9	2	11
中咽頭	40	11	51
下咽頭	55	7	62
喉頭	60	9	69
口腔	39	35	74
鼻副鼻腔	9	4	13
唾液腺	7	8	15
その他	4	5	9
計	223	81	304



TNM悪性腫瘍の分類 第8版

[T分類]

TX 原発腫瘍の評価が不可能

T0 原発腫瘍を認めない

Tis 上皮内癌

p16陰性中咽頭癌またはp16免疫組織化学検査を行っていない中咽頭癌 (p16陰性)

T1 最大径が2cm以下の腫瘍

T2 最大径が2cmをこえるが4cm以下の腫瘍

T3 最大径が4cmをこえる腫瘍、または喉頭蓋舌面へ進展する腫瘍

T4a 次のいずれかに浸潤する腫瘍：喉頭*、舌深層の筋肉/外舌筋(オトガイ舌筋、舌骨舌筋、口蓋舌筋、茎突舌筋)、内側翼突筋、硬口蓋、または下顎骨

T4b 次のいずれかに浸潤する腫瘍：外側翼突筋、翼状突起、上咽頭側壁、頭蓋底、または頸動脈を全周性に取り囲む腫瘍

注

*舌根または喉頭蓋谷の原発腫瘍から喉頭蓋舌面表面への粘膜進展は喉頭浸潤ではない。

p16陽性中咽頭癌 (p16陽性)

T1 最大径が2cm以下の腫瘍

T2 最大径が2cmをこえるが4cm以下の腫瘍

T3 最大径が4cmをこえる腫瘍、または喉頭蓋舌面へ進展する腫瘍

T4 次のいずれかに浸潤する腫瘍：喉頭*、舌深層の筋肉/外舌筋(オトガイ舌筋、舌骨舌筋、口蓋舌筋、茎突舌筋)、内側翼突筋、硬口蓋、下顎骨、外側翼突筋、翼状突起、上咽頭側壁、頭蓋底、または頸動脈を全周性に取り囲む腫瘍

[T分類]

TX 原発腫瘍の評価が不可能

T0 原発腫瘍を認めない

Tis 上皮内癌

p16陰性中咽頭癌またはp16免疫組織化学検査を行っていない中咽頭癌 (p16陰性)

T1 最大径が2cm以下の腫瘍

T2 最大径が2cmをこえるが4cm以下の腫瘍

T3 最大径が4cmをこえる腫瘍、または喉頭蓋舌面へ進展する腫瘍

T4a 次のいずれかに浸潤する腫瘍：喉頭*、舌深層の筋肉/外舌筋(オトガイ舌筋、舌骨舌筋、口蓋舌筋、茎突舌筋)、内側翼突筋、硬口蓋、または下顎骨

T4b 次のいずれかに浸潤する腫瘍：外側翼突筋、翼状突起、上咽頭側壁、頭蓋底、または頸動脈を全周性に取り囲む腫瘍

注

*舌根または喉頭蓋谷の原発腫瘍から喉頭蓋舌面表面への粘膜進展は喉頭浸潤ではない。

p16陽性中咽頭癌 (p16陽性)

T1 最大径が2cm以下の腫瘍

T2 最大径が2cmを

T3 最大径が4cmを

T4 次のいずれかに

舌骨舌筋、口蓋舌筋、内側翼突筋、硬口蓋、下顎骨、外側翼突筋、翼状突起、上咽頭側壁、頭蓋底、または頸動脈を全周性に取り囲む腫瘍

T4a, T4bが統合



TNM悪性腫瘍の分類 第8版

[N分類]

p16陰性

- NX 領域リンパ節の評価が不可能
- N0 領域リンパ節転移なし
- N1 同側の単発性リンパ節転移で最大径が3cm以下かつ節外浸潤なし
- N2 以下に記す転移：
 - N2a 同側の単発性リンパ節転移で最大径が3cmをこえるが6cm以下かつ節外浸潤なし
 - N2b 同側の多発性リンパ節転移で最大径が6cm以下かつ節外浸潤なし
 - N2c 両側または対側のリンパ節転移で最大径が6cm以下かつ節外浸潤なし
- N3a 最大径が6cmをこえるリンパ節転移で節外浸潤なし
- N3b 単発性または多発性リンパ節転移で臨床的節外浸潤あり*

注

*皮膚浸潤か、下層の筋肉もしくは隣接構造に強い固着や結合を示す軟部組織の浸潤がある場合、または神経浸潤の臨床的症狀がある場合は、臨床的節外浸潤として分類する。

正中リンパ節は同側リンパ節である。

p16陽性

- NX 領域リンパ節の評価が不可能
- N0 領域リンパ節転移なし
- N1 一侧のリンパ節転移で最大径がすべて6cm以下
- N2 対側または両側のリンパ節転移で最大径がすべて6cm以下
- N3 最大径が6cmをこえるリンパ節転移

注

*正中リンパ節は同側リンパ節である。

[N分類]

p16陰性

- NX 領域リンパ節の評価が不可能
- N0 領域リンパ節転移なし
- N1 同側の単発性リンパ節転移で最大径が3cm以下かつ節外浸潤なし
- N2 以下に記す転移：
 - N2a 同側の単発性リンパ節転移で最大径が6cm以下かつ節外浸潤なし
 - N2b 同側の多発性リンパ節転移で最大径が6cm以下かつ節外浸潤なし
 - N2c 両側または対側のリンパ節転移で最大径が6cm以下かつ節外浸潤なし
- N3a 最大径が6cmをこえるリンパ節転移で節外浸潤なし
- N3b 単発性または多発性リンパ節転移で臨床的節外浸潤あり*

N3a/N3bが定義

注

*皮膚浸潤か、下層の筋肉もしくは隣接構造に強い固着や結合を示す軟部組織の浸潤がある場合、または神経浸潤の臨床的症狀がある場合は、臨床的節外浸潤として分類する。

正中リンパ節は同側リンパ節である。

p16陽性

- NX 領域リンパ節の評価が不可能
- N0 領域リンパ節転移なし
- N1 一侧のリンパ節転移で最大径がすべて6cm以下
- N2 対側または両側のリンパ節転移で最大径がすべて6cm以下
- N3 最大径が6cmをこえるリンパ節転移

従来のN3

注

*正中リンパ節は同側リンパ節である。

TNM悪性腫瘍の分類 第8版

[病期分類]

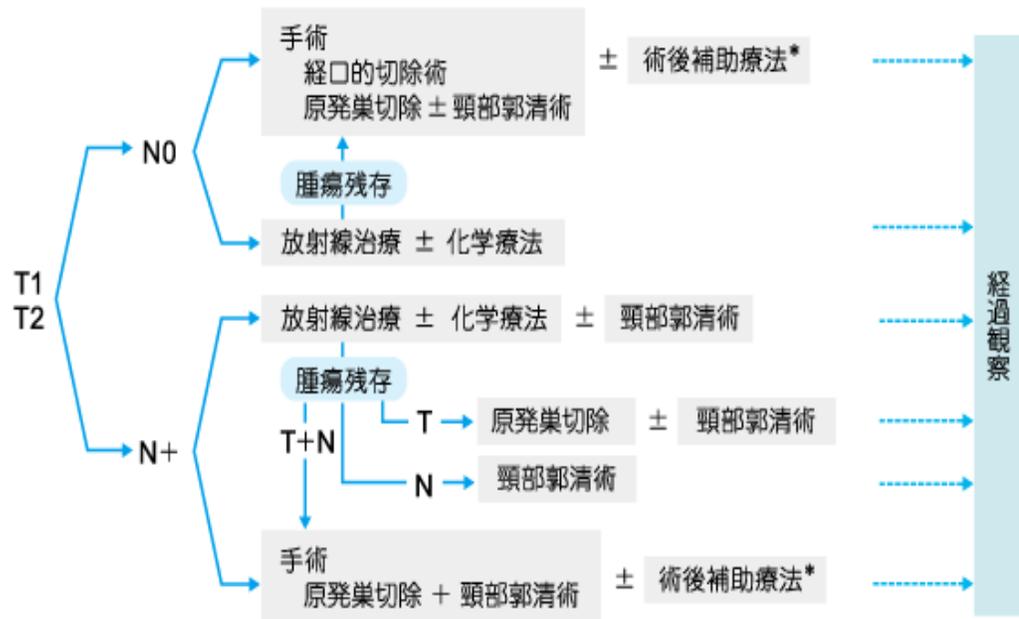
p16陰性			
0期	Tis	N0	M0
I期	T1	N0	M0
II期	T2	N0	M0
III期	T3	N0	M0
	T1, T2, T3	N1	M0
IVA期	T1, T2, T3	N2	M0
	T4a	N0, N1, N2	M0
IVB期	T4b	Nに関係なく	M0
	Tに関係なく	N3	M0
IVC期	Tに関係なく	Nに関係なく	M1
p16陽性			
0期	Tis	N0	M0
I期	T1, T2	N0, N1	M0
II期	T1, T2	N2	M0
	T3	N0, N1, N2	M0
III期	T1, T2, T3	N3	M0
	T4	Nに関係なく	M0
IV期	Tに関係なく	Nに関係なく	M1



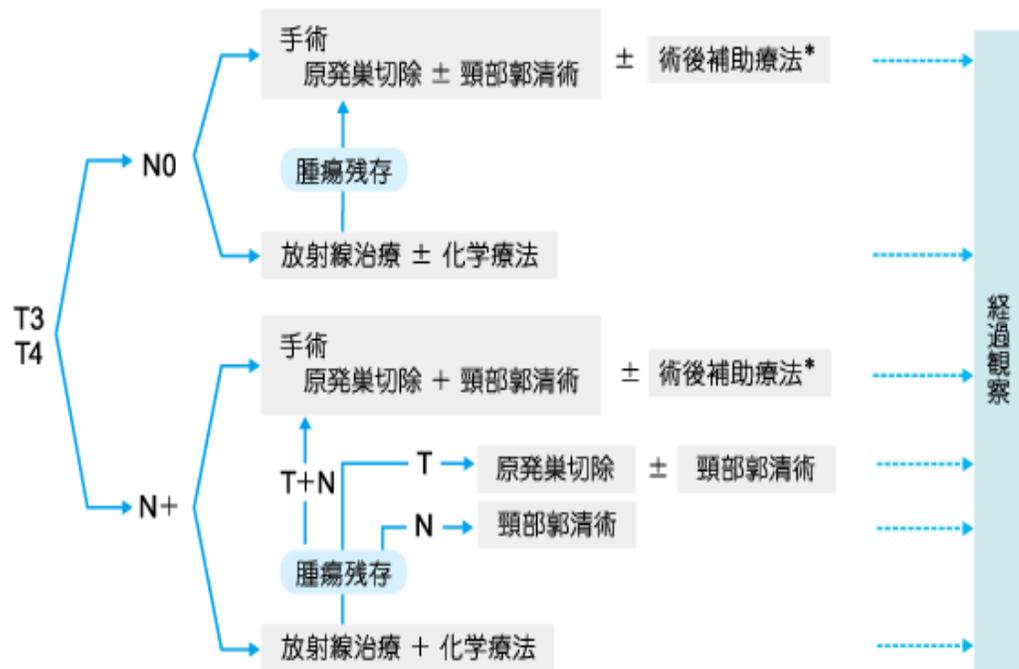
[病期分類]

p16陰性			
0期	Tis	N0	M0
I期	T1	N0	M0
II期	T2	N0	M0
III期	T3	N0	M0
IV期	T4	N0, N1, N2	M0
IV A期	T1, T2, T3	N2	M0
IV B期	T4a	N0, N1, N2	M0
IV C期	T4b	Nに関係なく	M0
	Tに関係なく	N3	M1
p16陽性			
0期	Tis	N0	M0
I期	T1, T2	N0, N1	M0
II期	T1, T2	N2	M0
III期	T1, T2, T3	N0, N1, N2	M0
IV期	T1, T2, T3, T4	N3	M0
	T4	Nに関係なく	M0
	Tに関係なく	Nに関係なく	M1

Down staging
 I ≡ 従来の I ~ III期
 II ≡ 従来の IVA期
 III ≡ 従来の IVB期
 IV ≡ 従来の IVC期

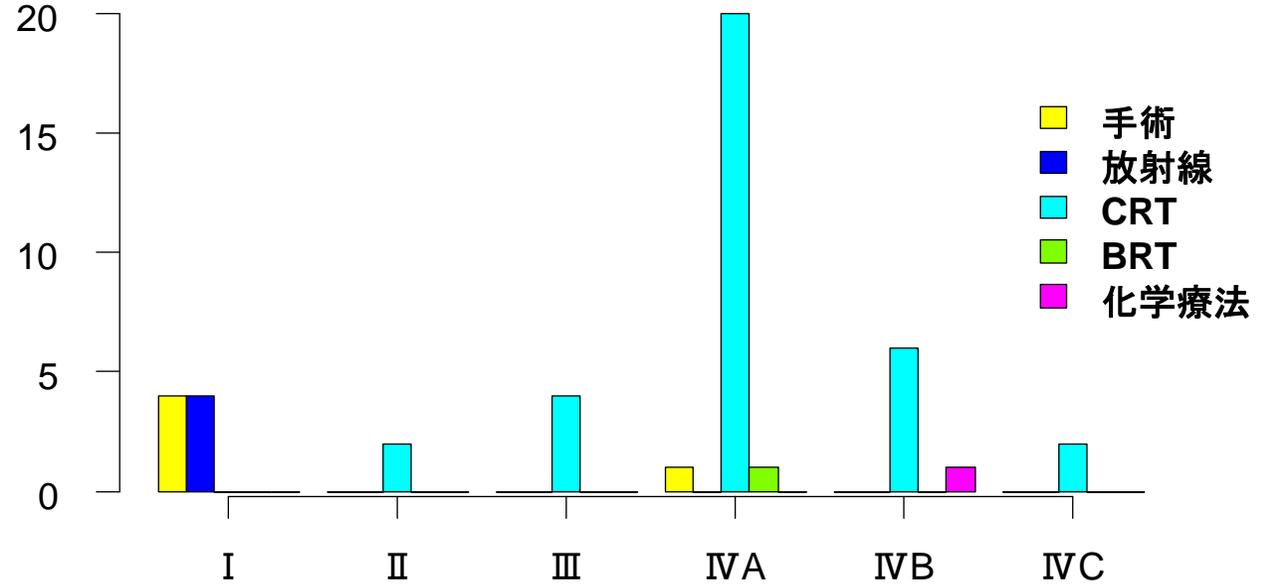
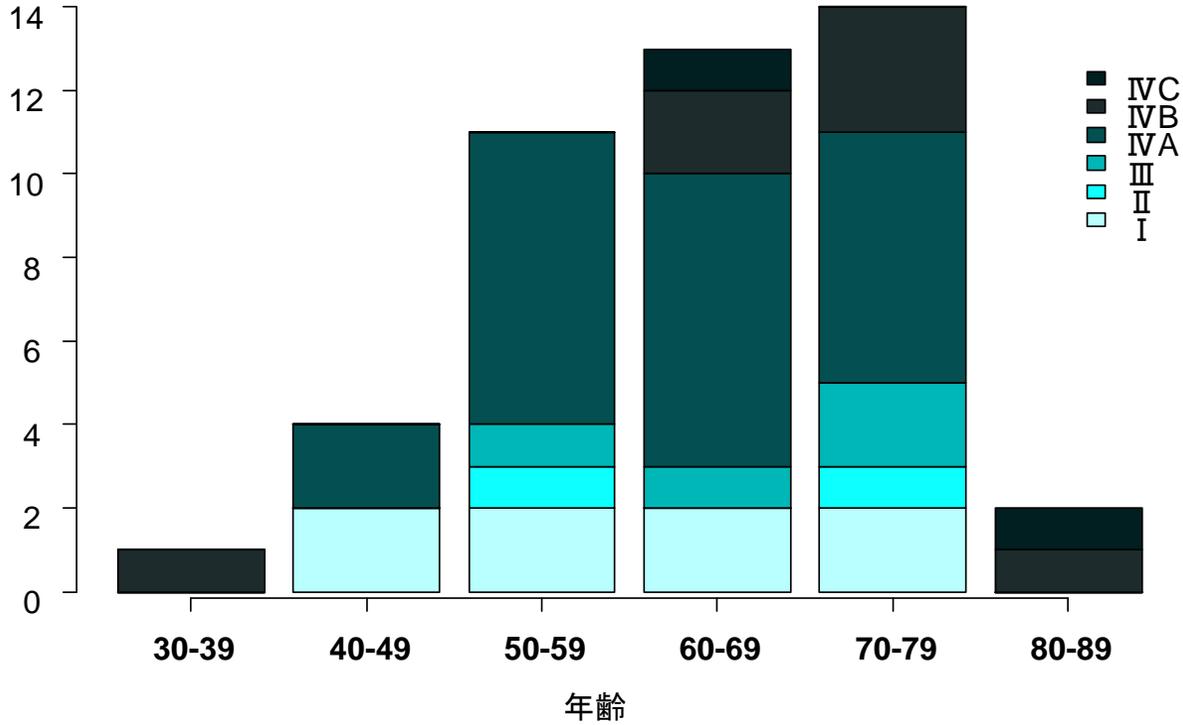


T1, T2
→ **手術or放射線**
(経口的)

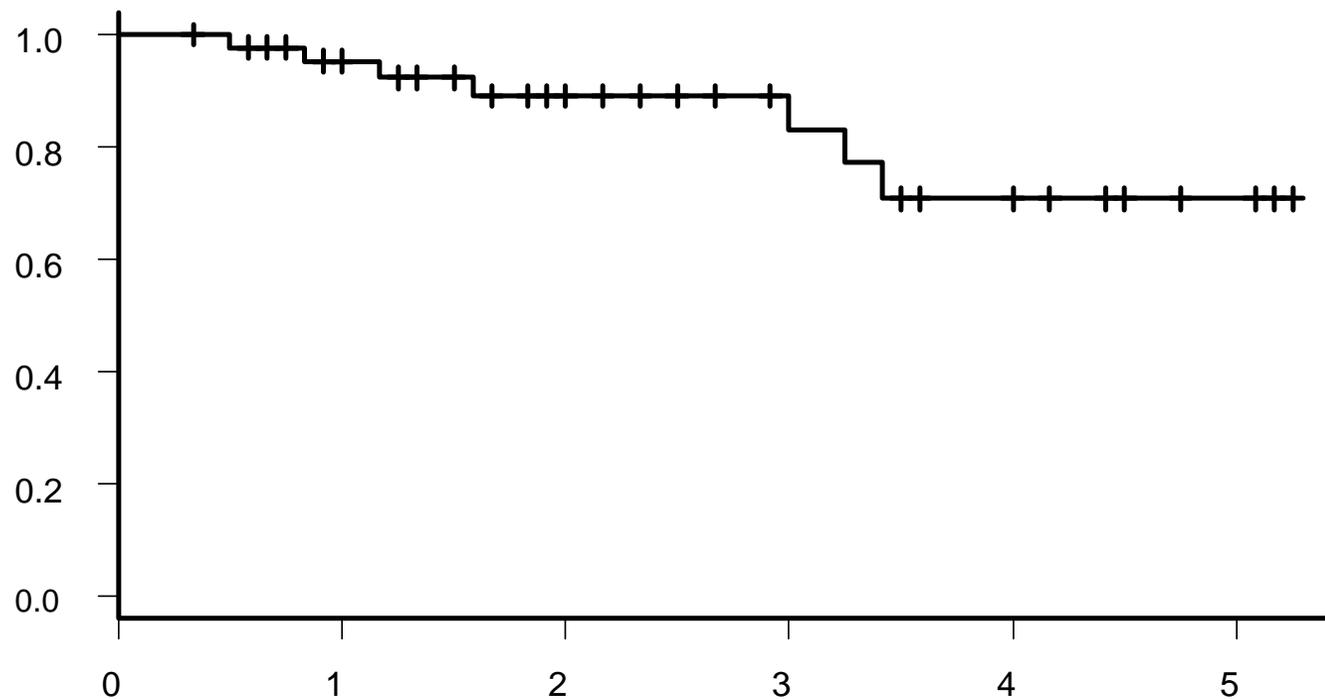


T3, T4
→ **手術or放射線化学療法**
(拡大手術)

当院の現況

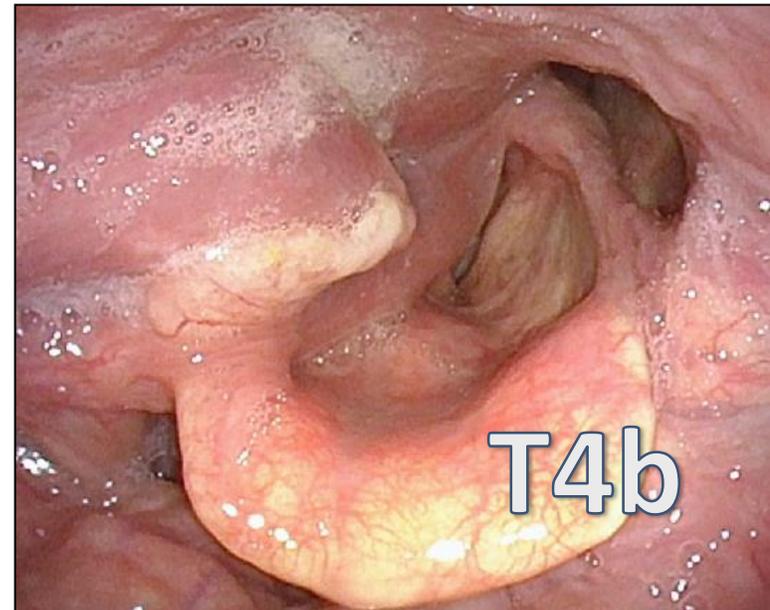
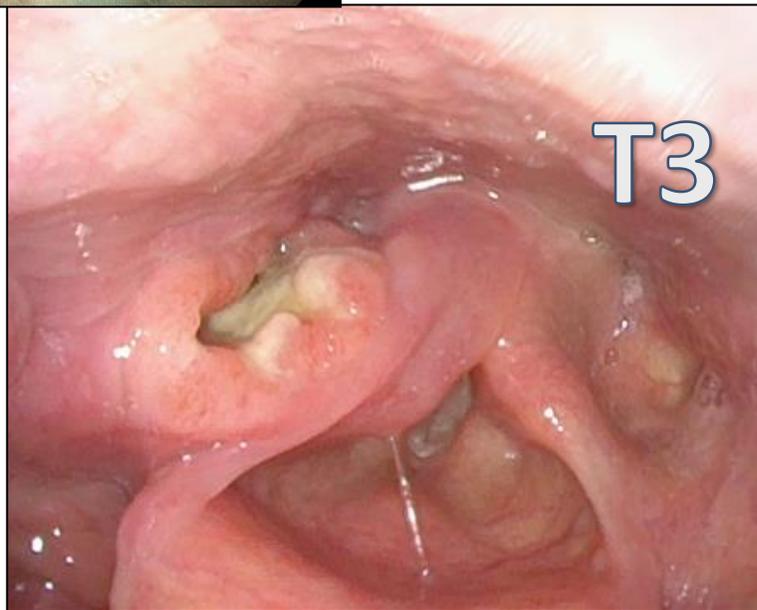
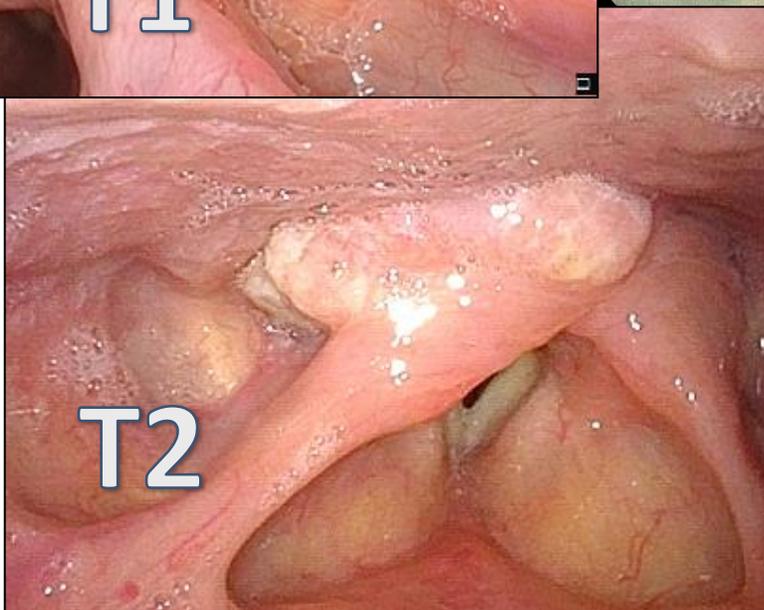
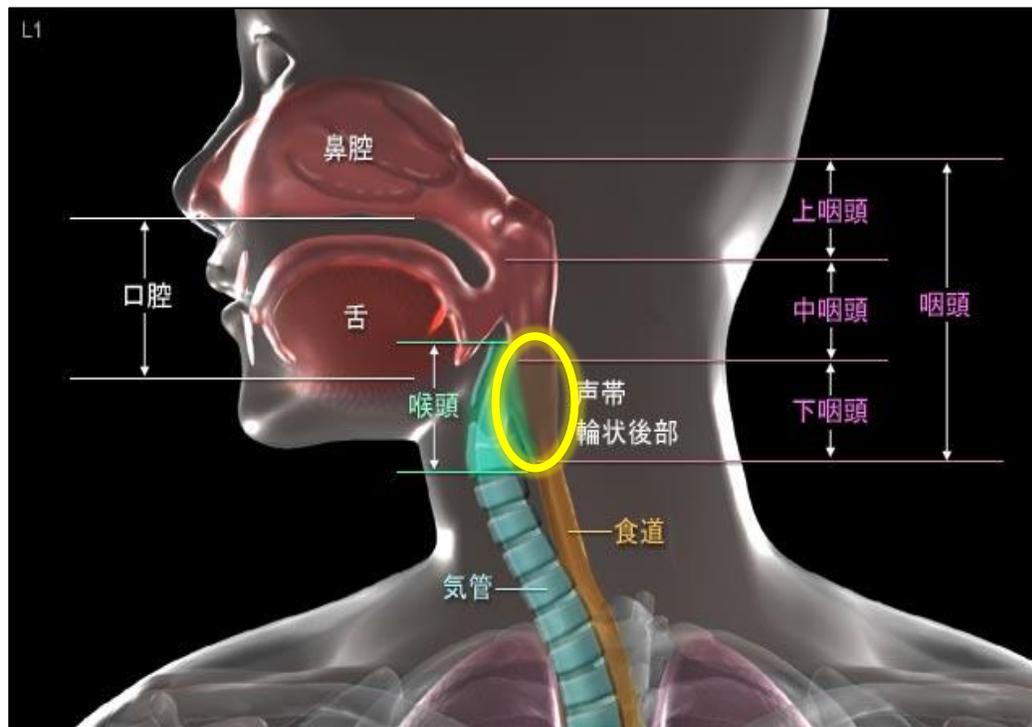
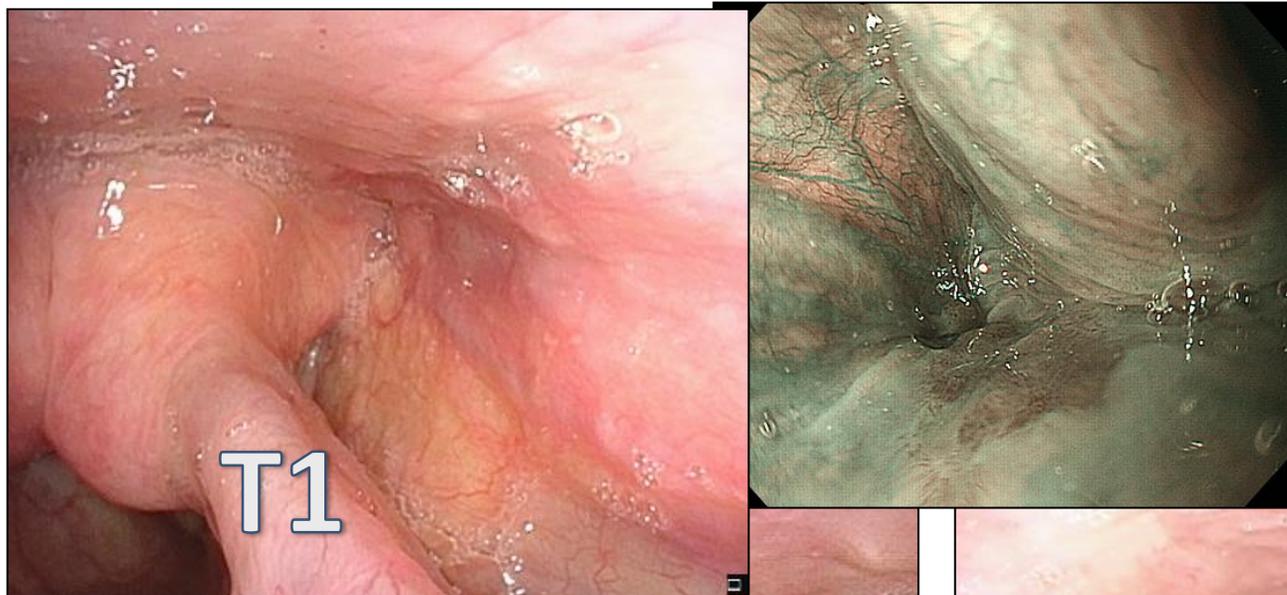


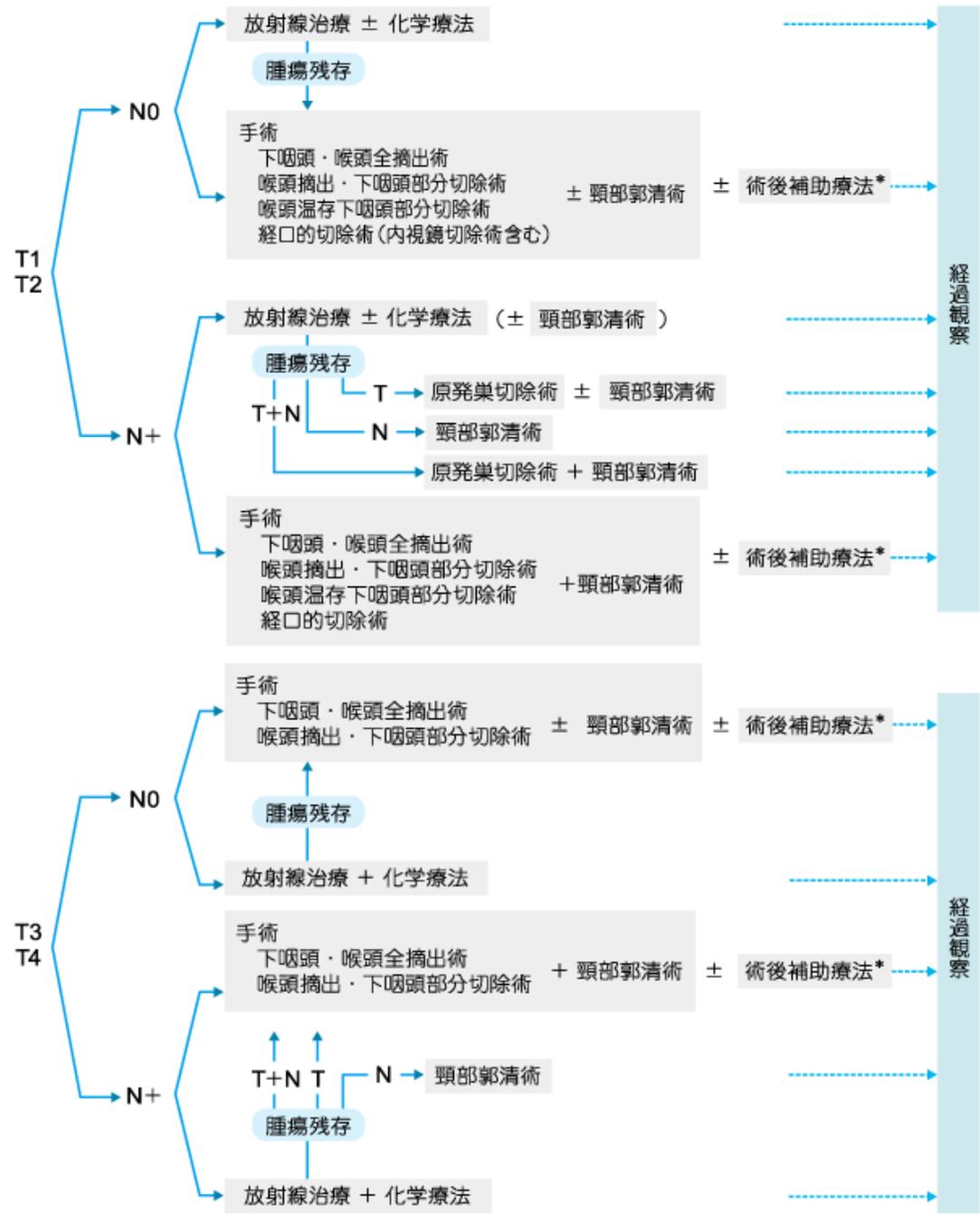
治療成績(生存曲線)



5年生存率(95%信頼区間)
0.708 (0.454-0.860)

下咽頭がん





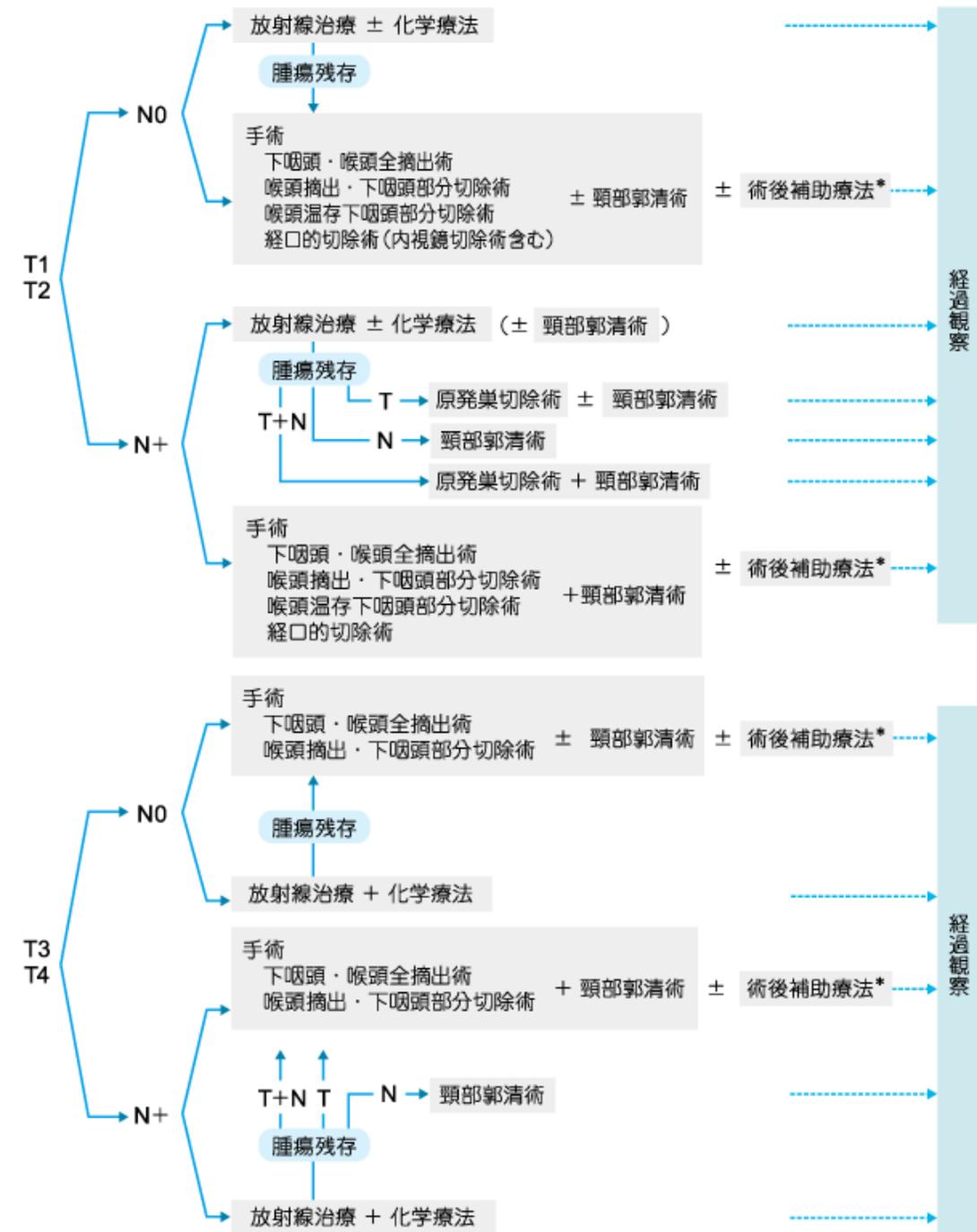
* : CQ11-4 参照

T1, T2

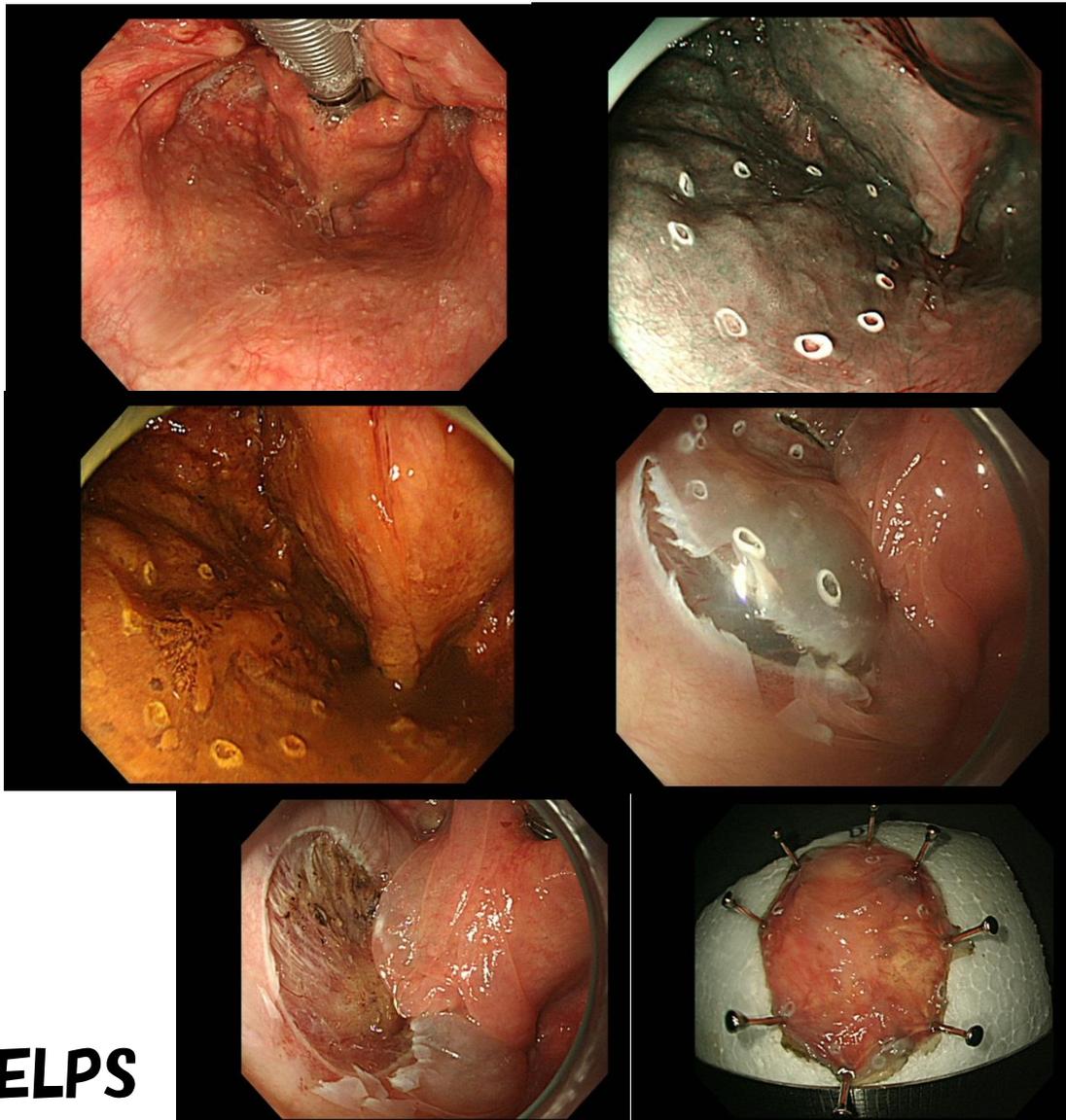
→ 放射線 (+ 化学療法) or 手術

T3, T4

→ 手術 or 放射線化学療法 (下咽頭喉頭全摘術)

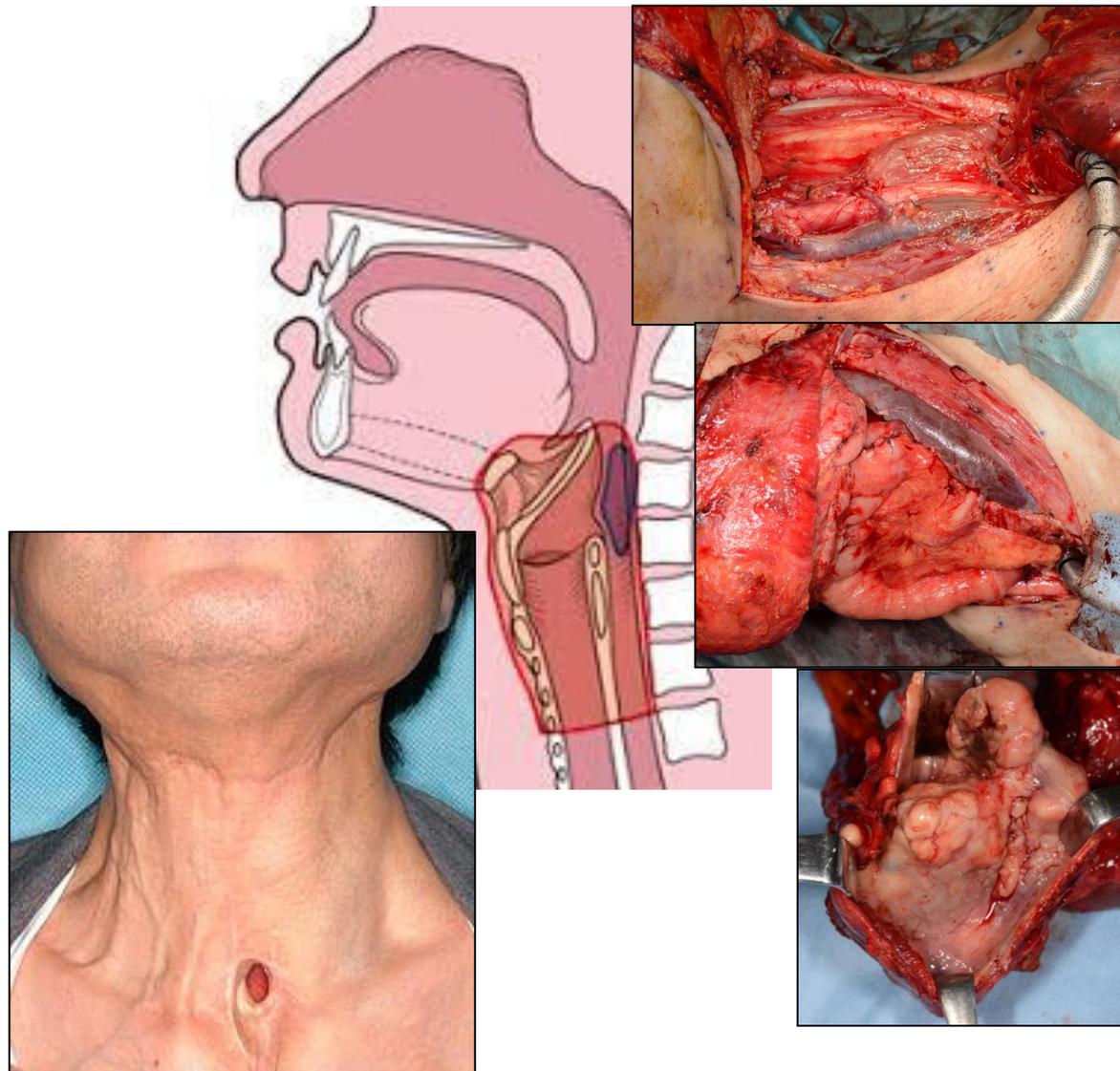


經口的切除



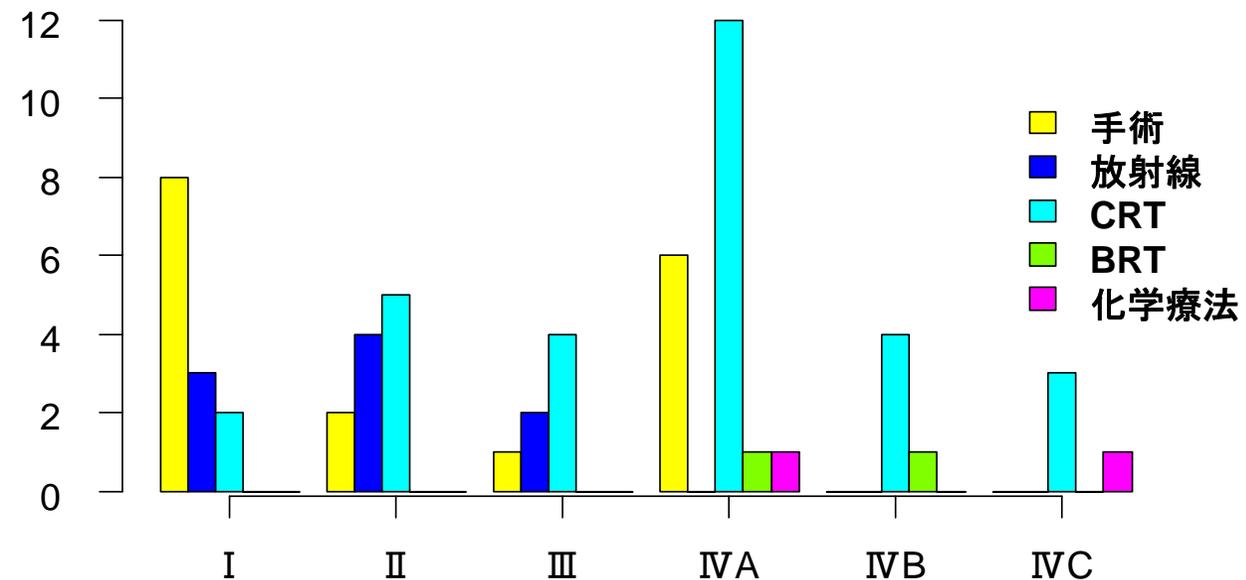
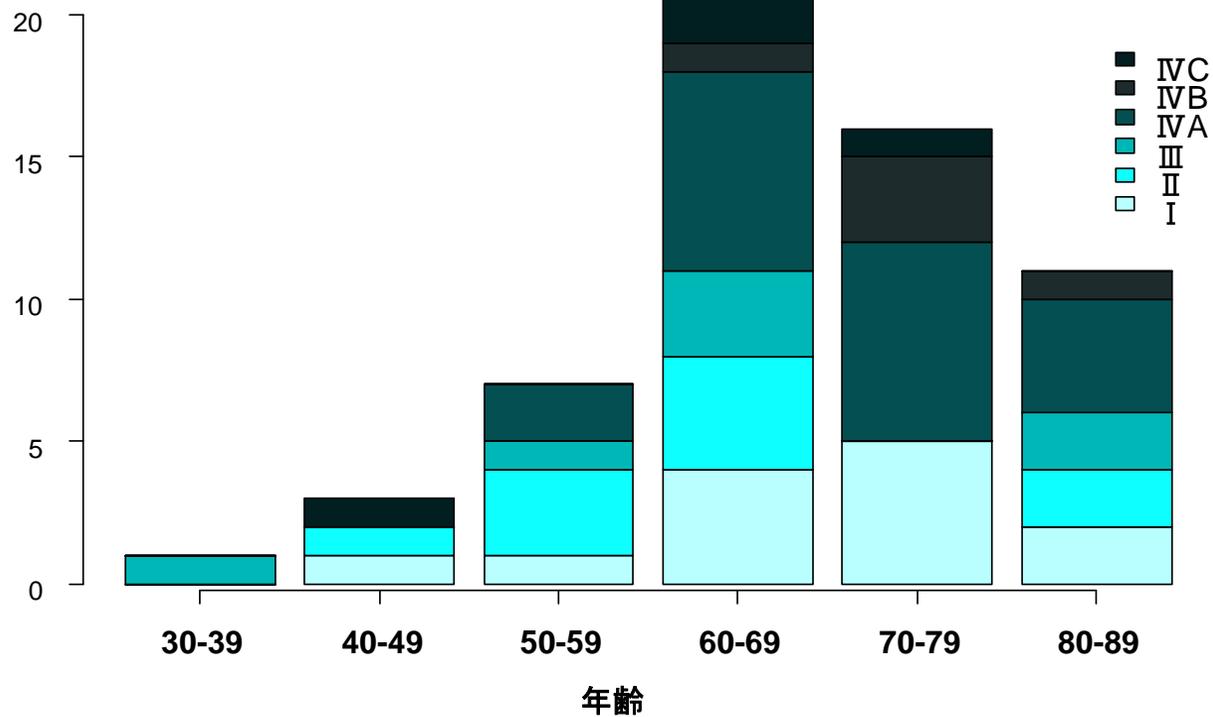
ELPS
(Endoscopic Laryngo-Pharyngeal Surgery)

下咽頭喉頭全摘術

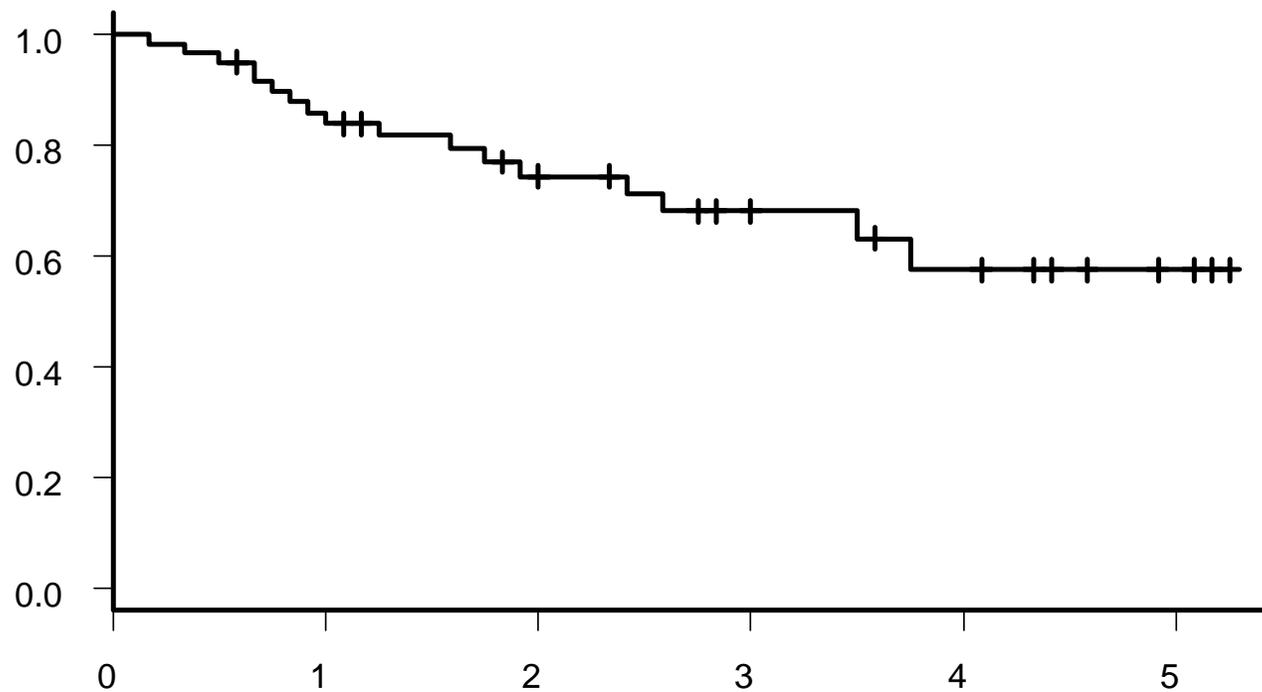


永久氣管孔：音声機能の喪失

当院の現況

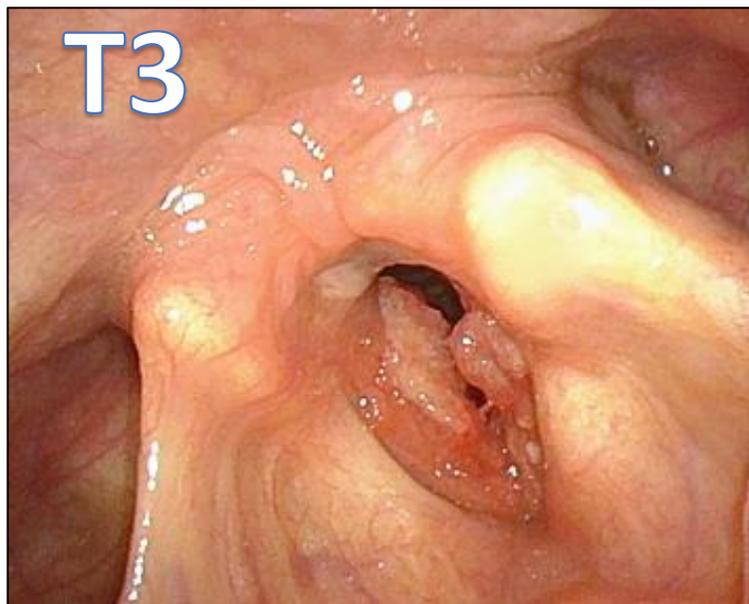
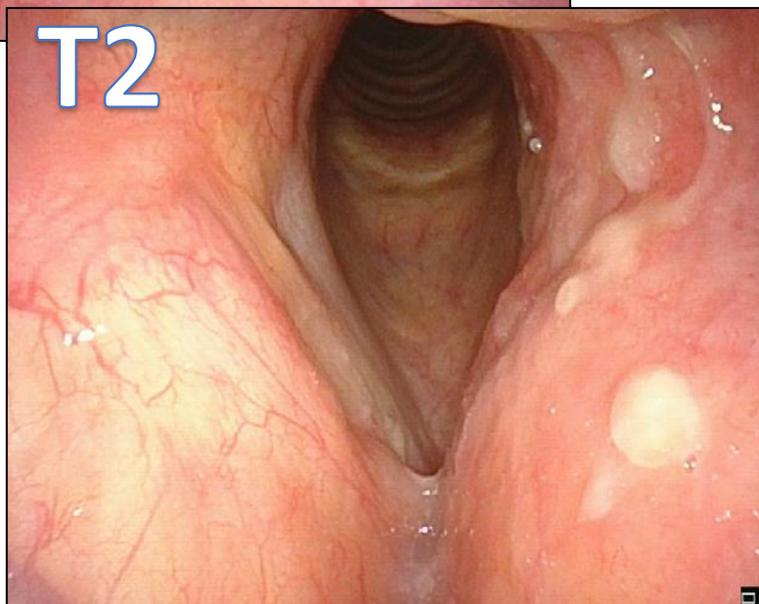
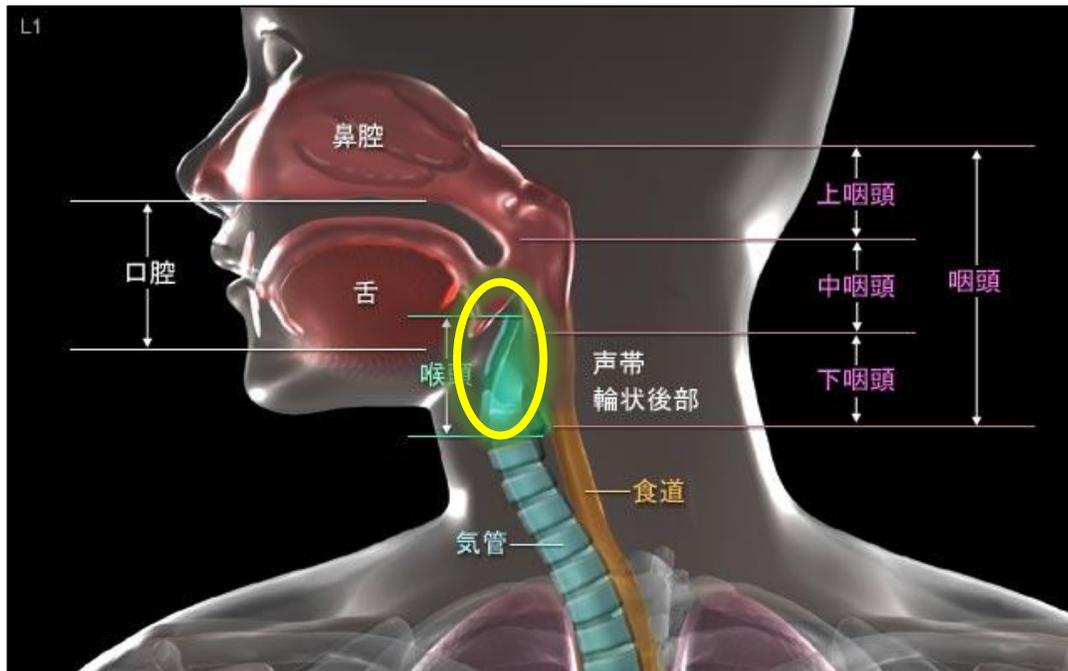
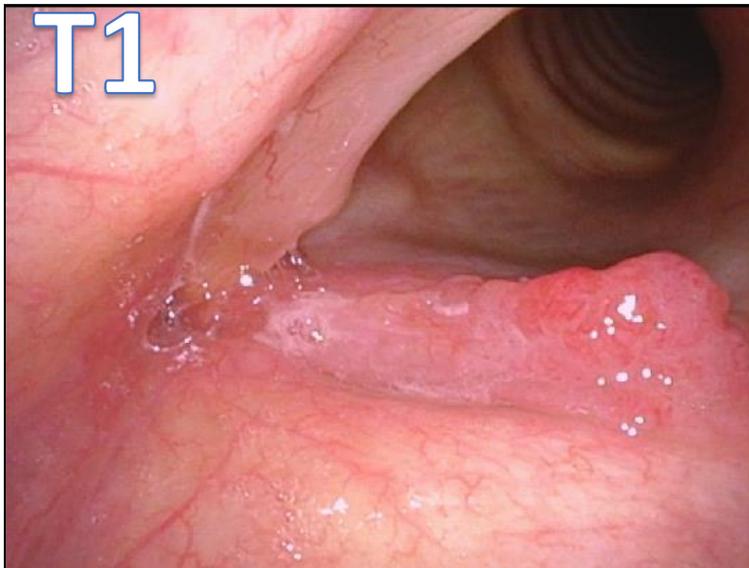


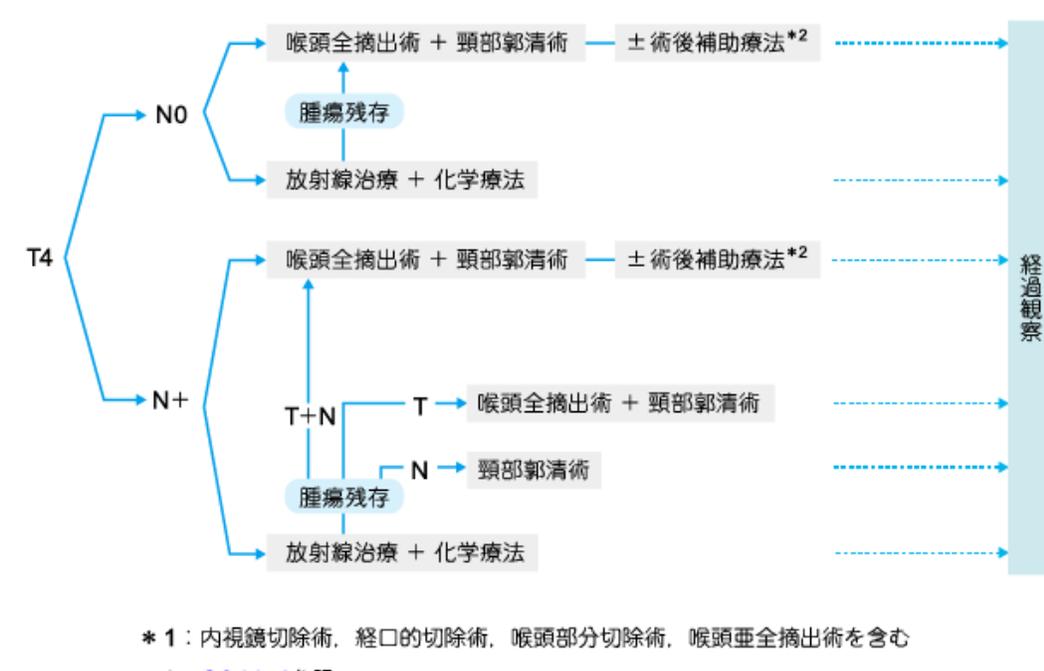
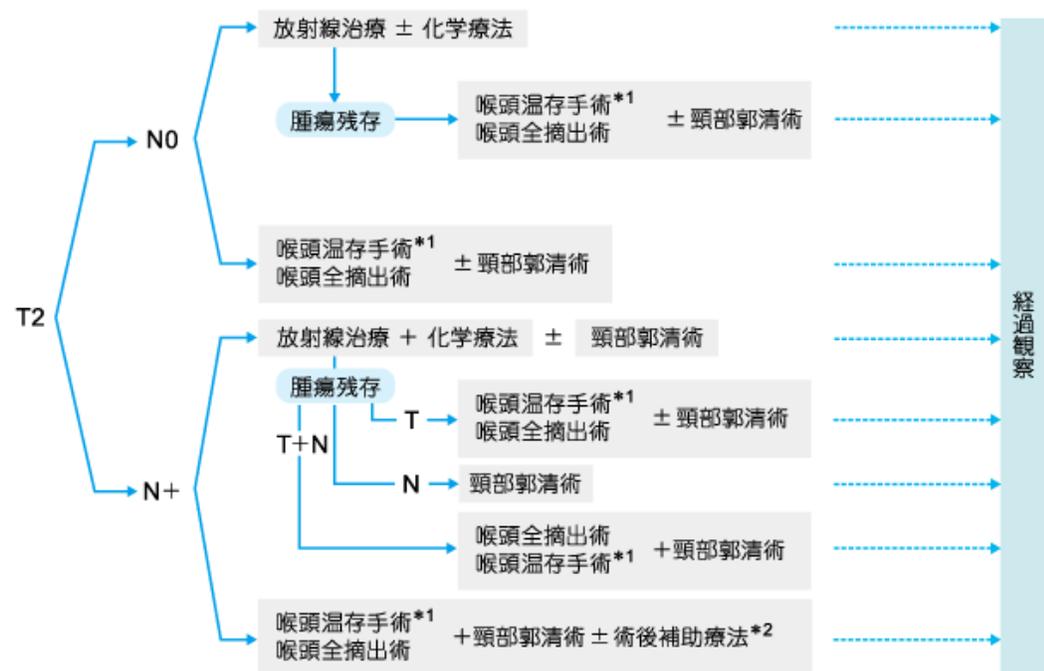
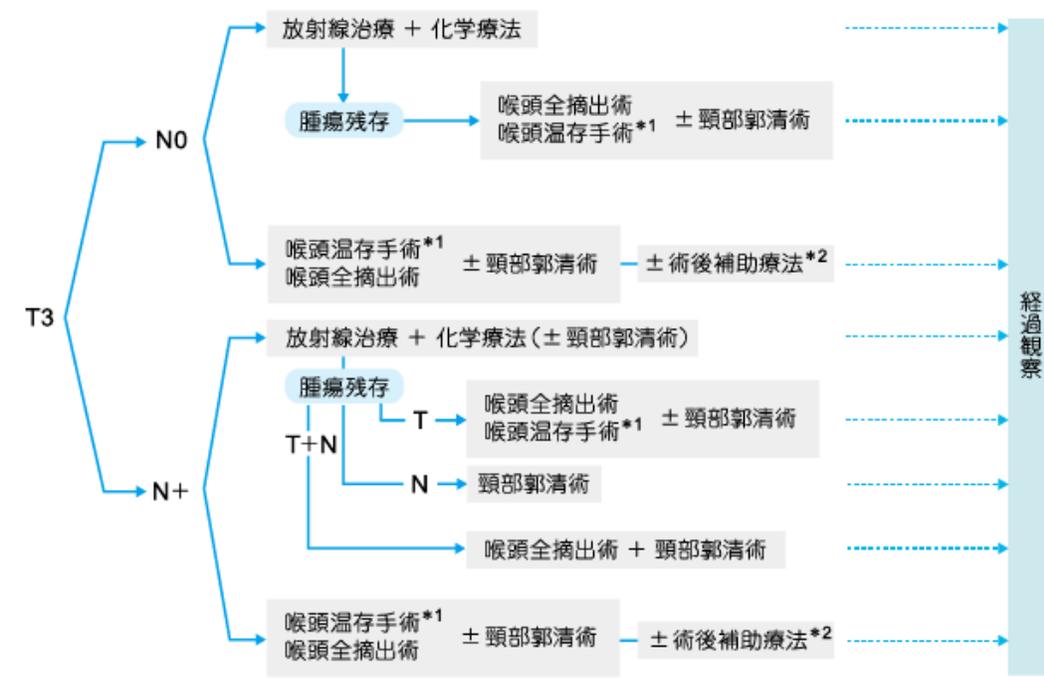
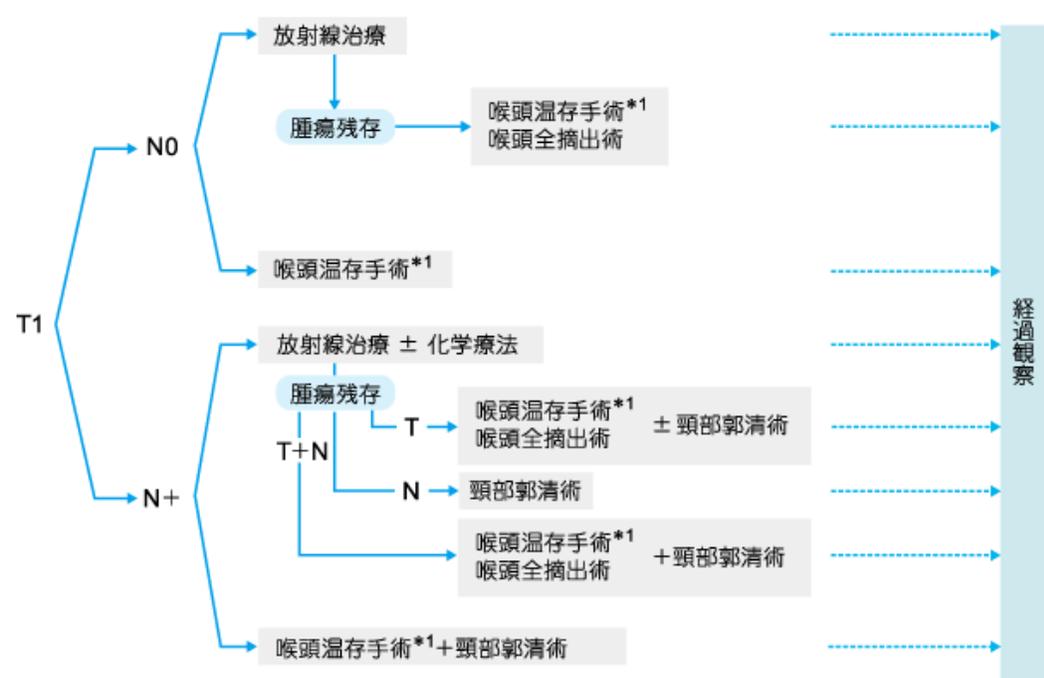
治療成績(生存曲線)



5生存率(95%信頼区間)
0.574 (0.376-0.730)

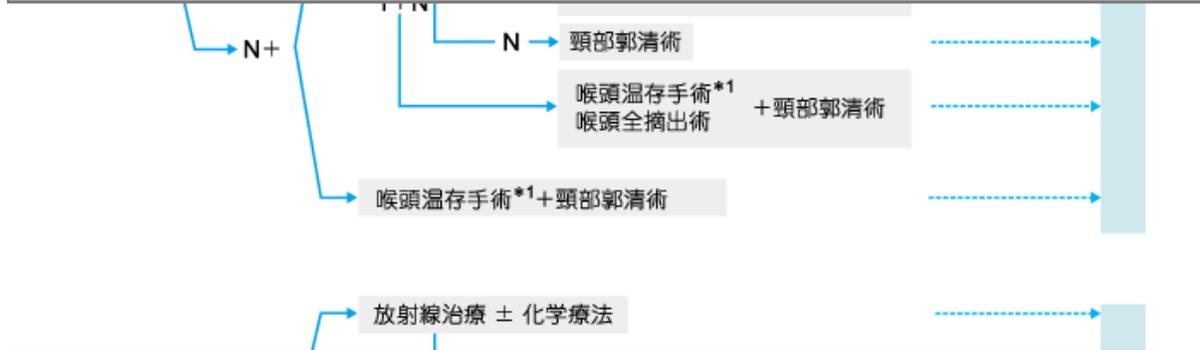
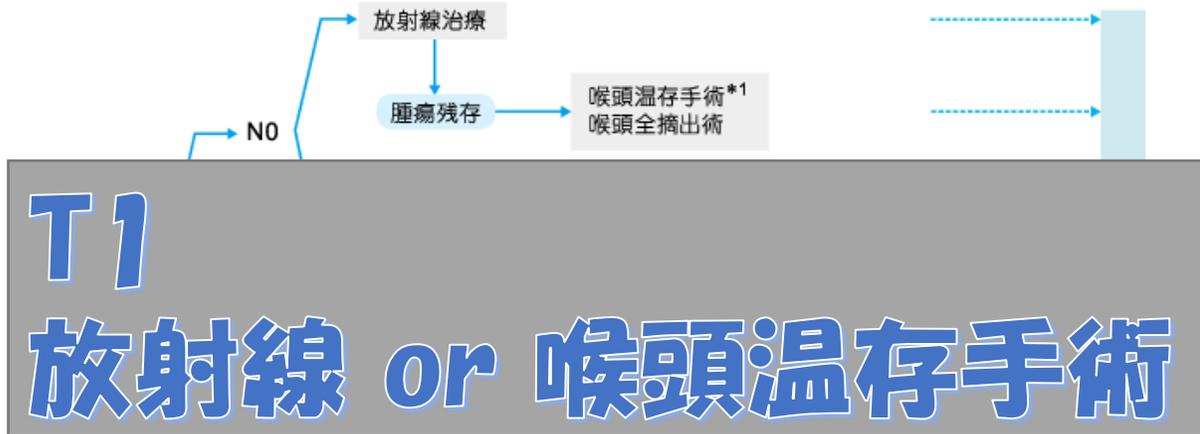
喉頭がん



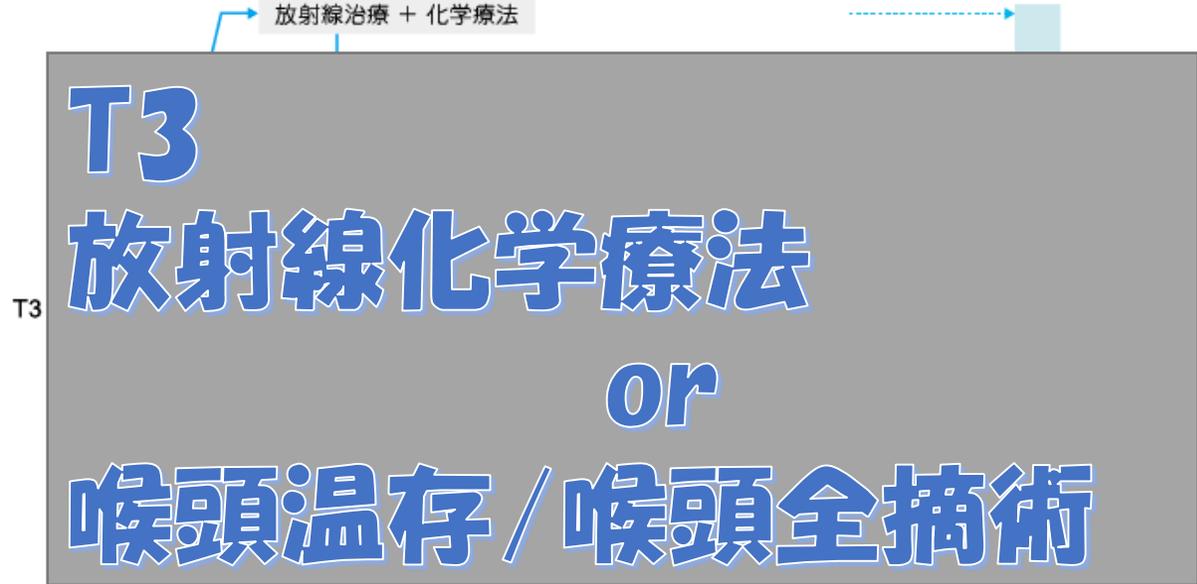


* 1 : 內視鏡切除術, 經口的切除術, 喉頭部分切除術, 喉頭全摘出術を含む

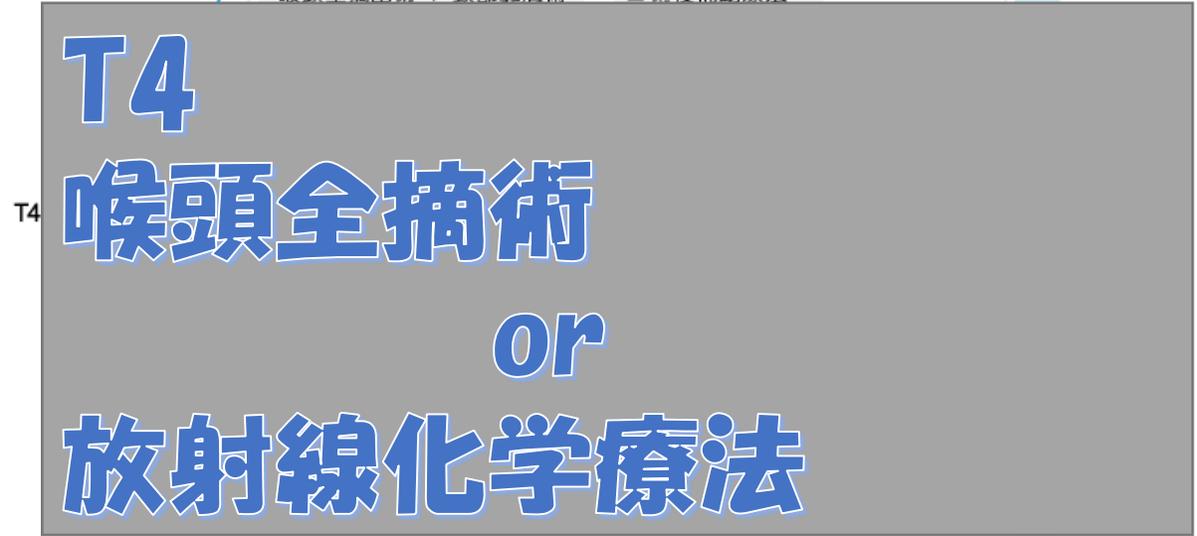
* 2 : CQ11-4参照



喉頭溫存手術*1
喉頭全摘出術 + 頸部郭清術 ± 術後補助療法*2

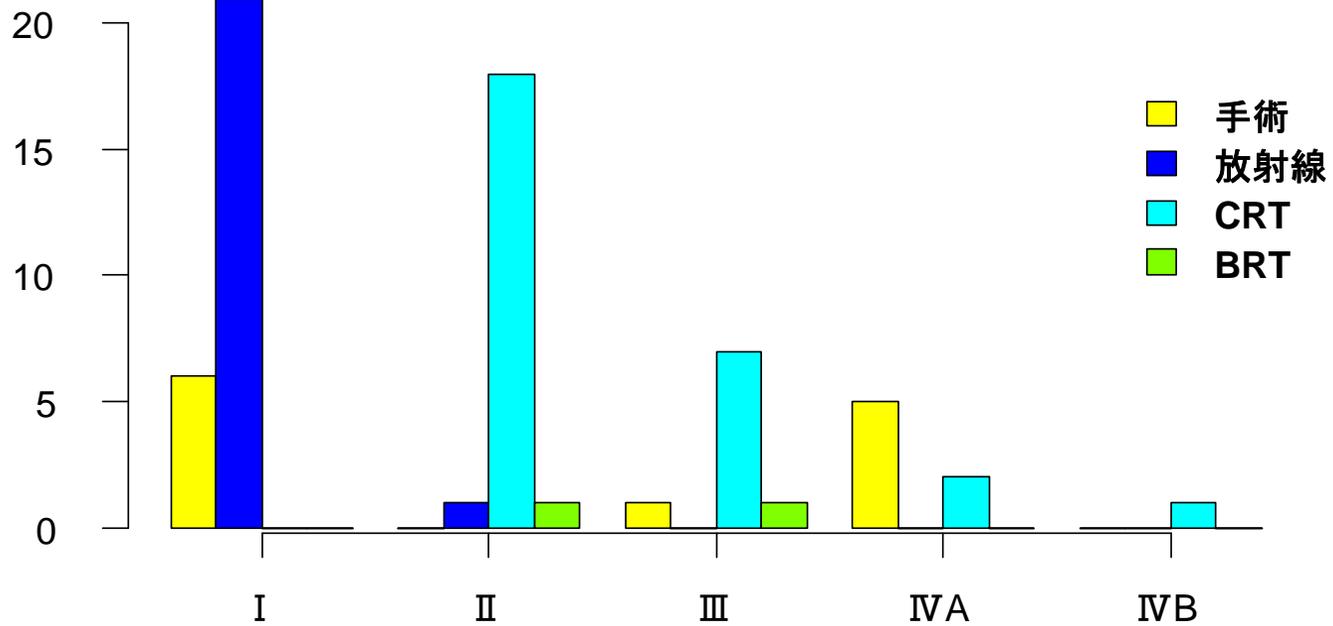
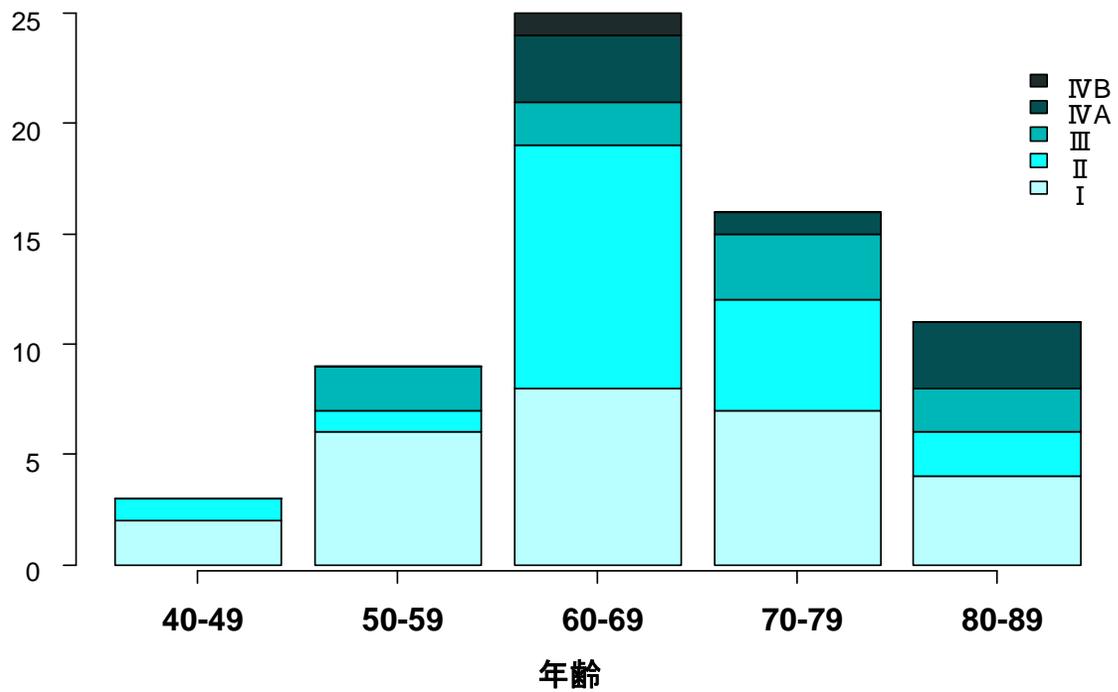


喉頭溫存手術*1
喉頭全摘出術 ± 頸部郭清術 ± 術後補助療法*2

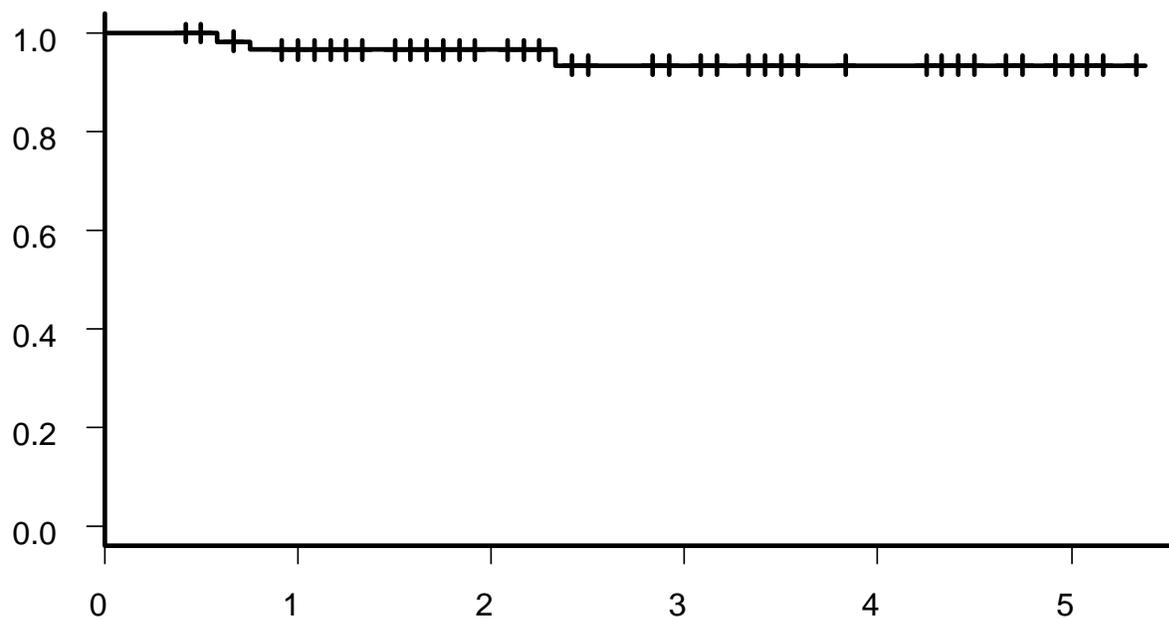


*1: 內視鏡切除術, 經口的切除術, 喉頭部分切除術, 喉頭全摘出術を含む

当院の現況

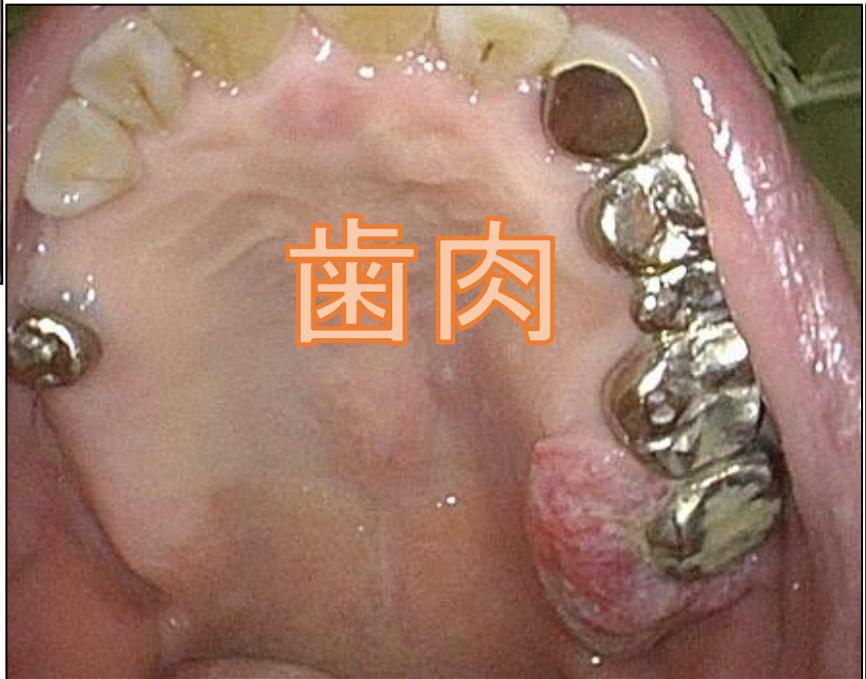
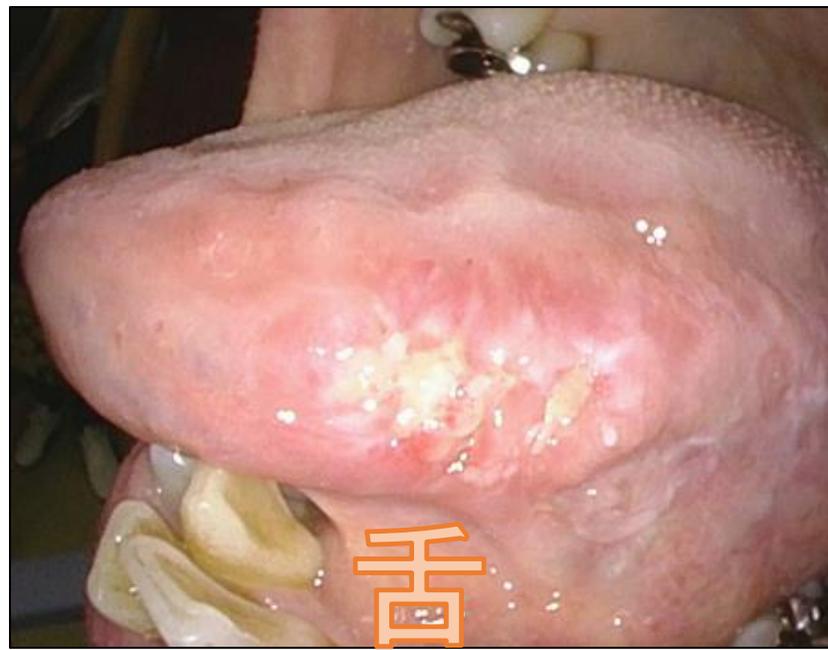
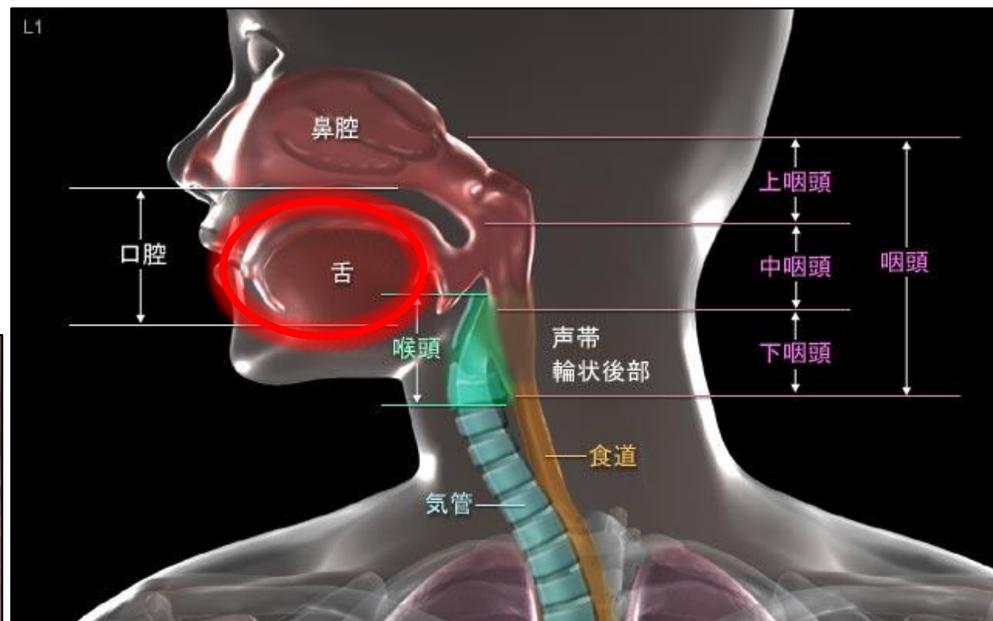


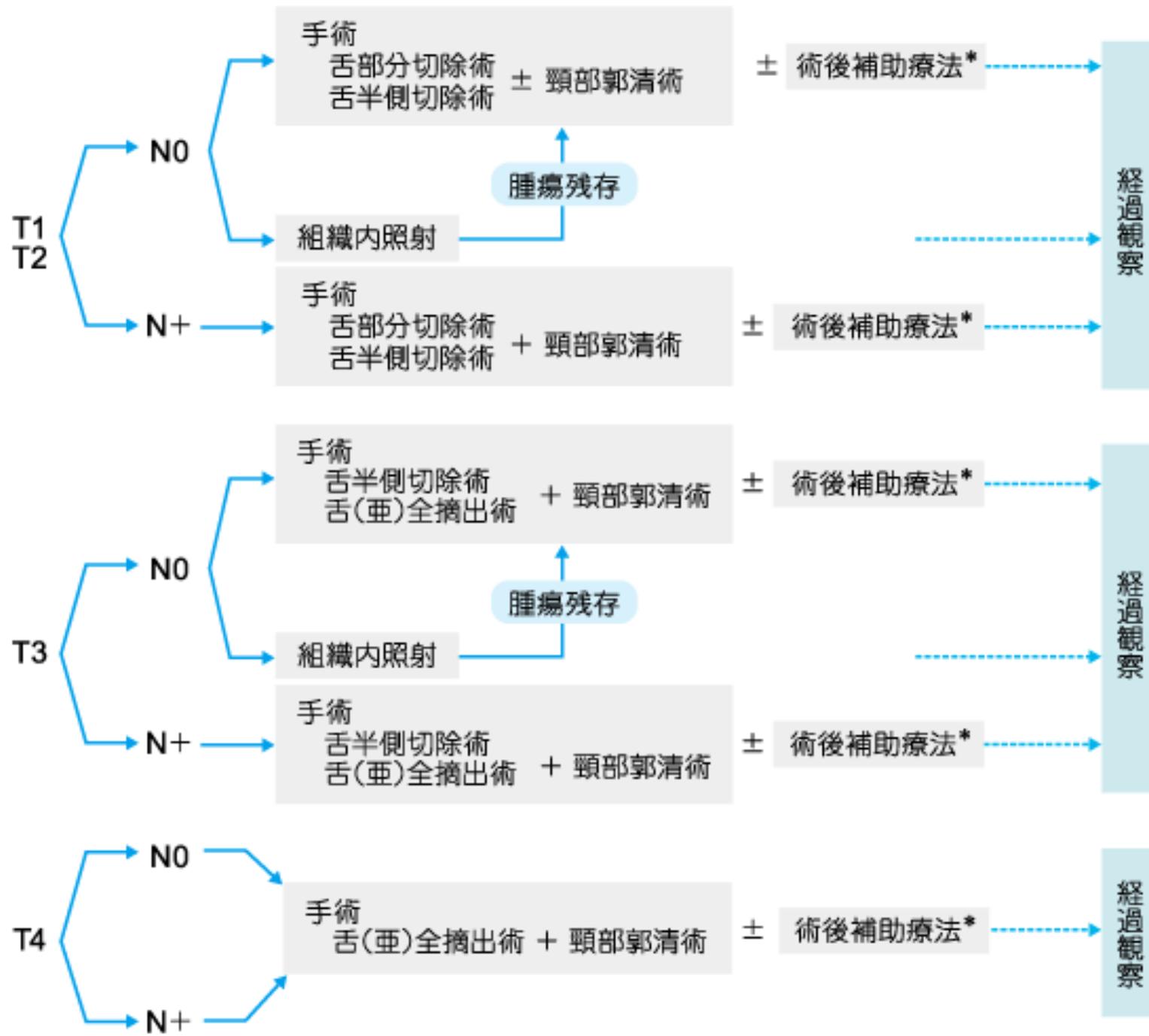
治療成績(生存曲線)



5年生存率(95%信頼区間)
0.935 (0.801-0.980)

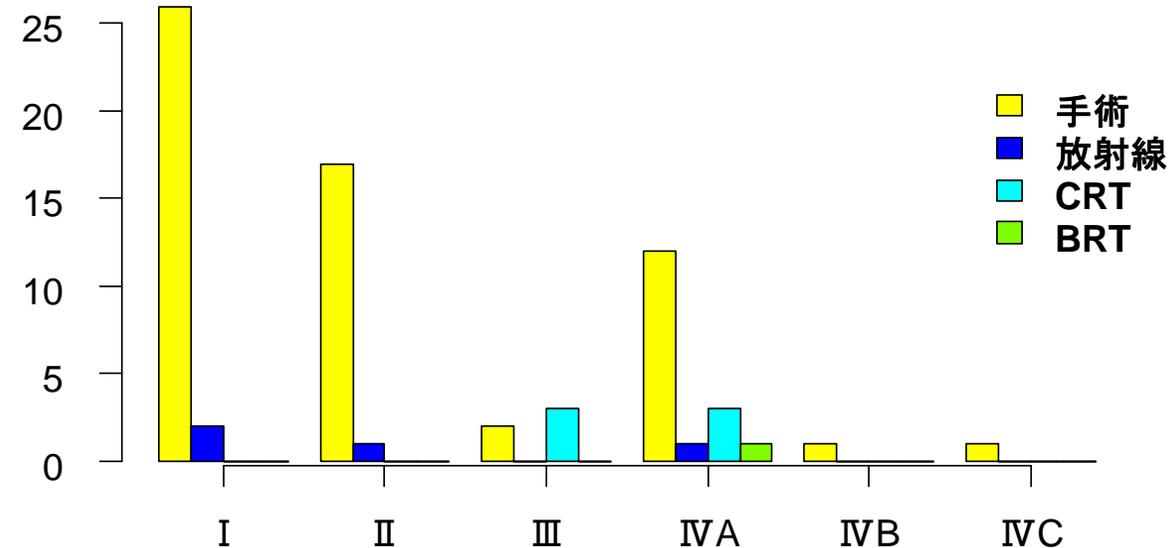
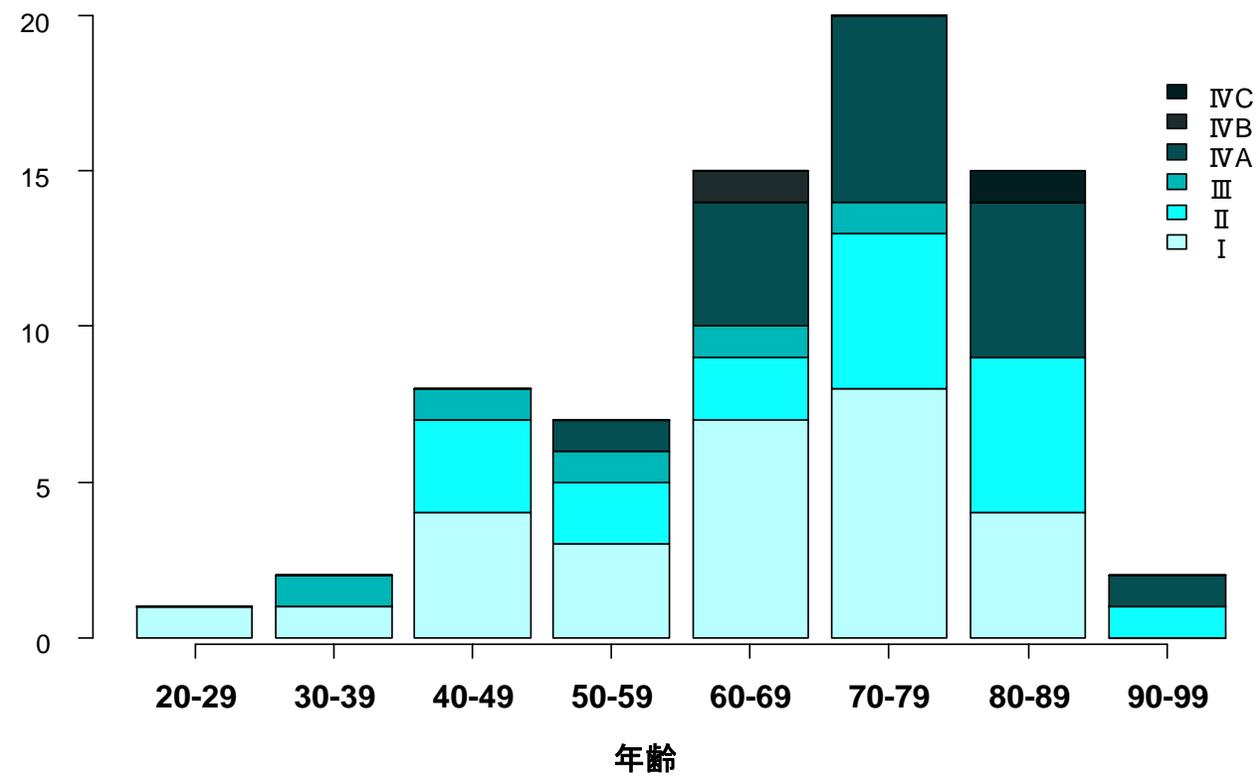
口腔がん



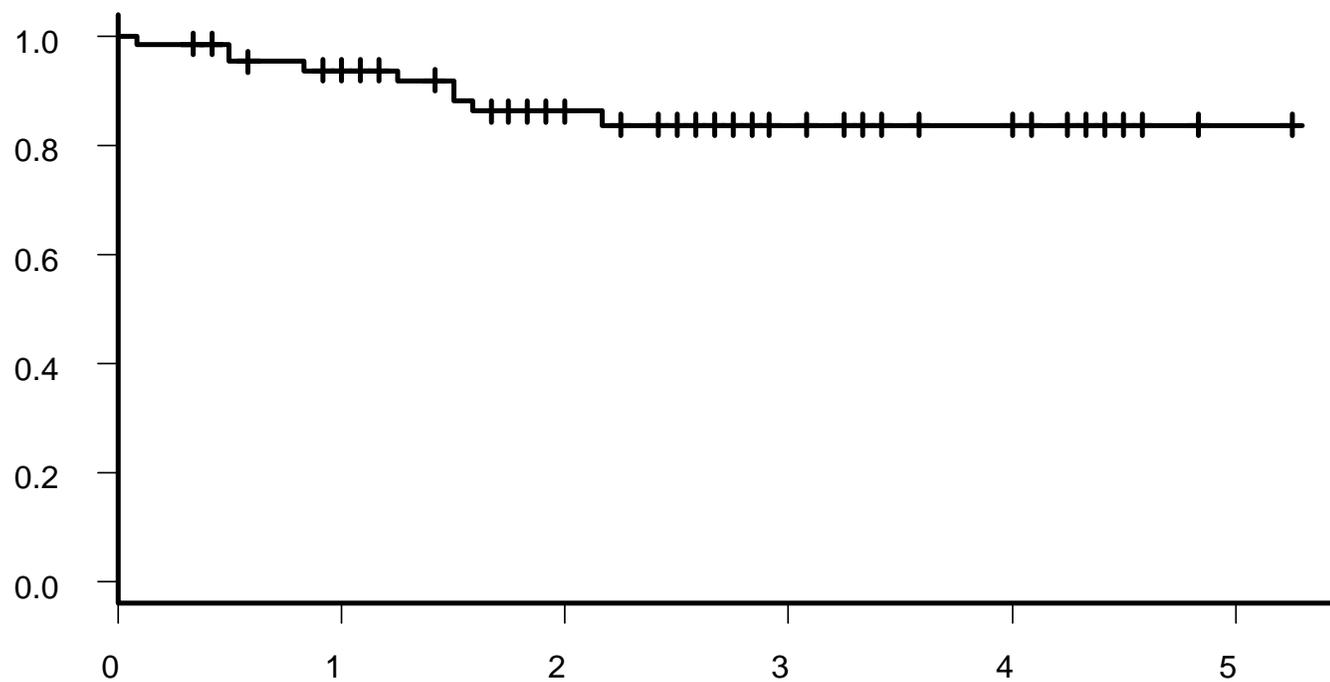


T1~T3
手術 or 組織內照射
T4 手術

当院の現況



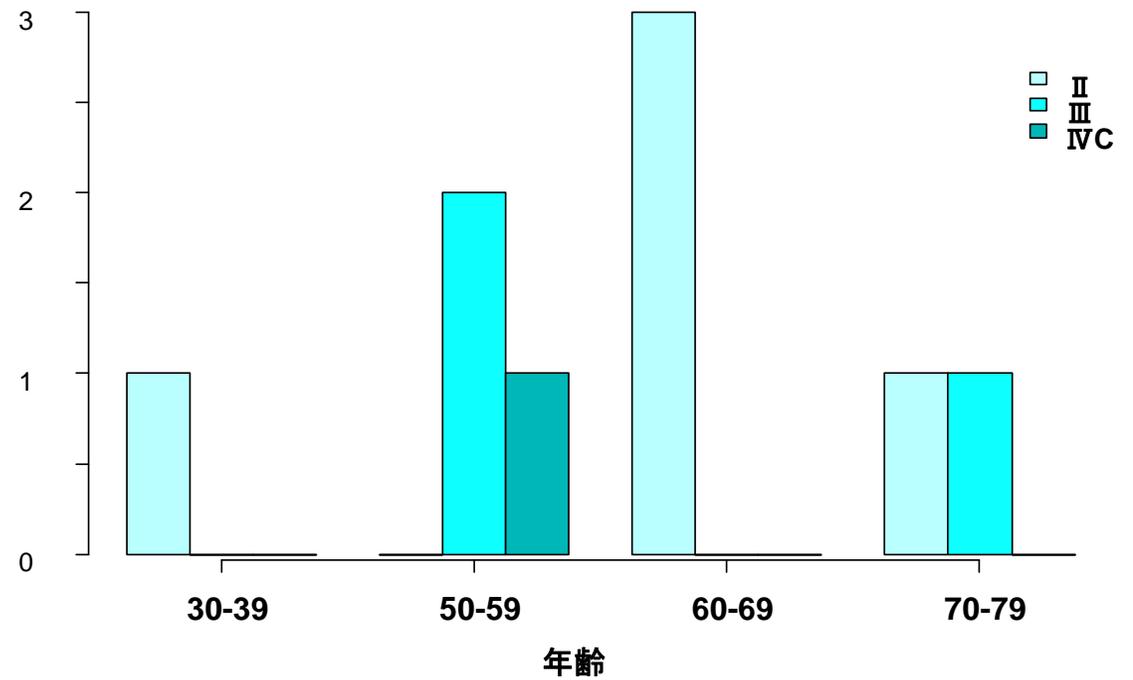
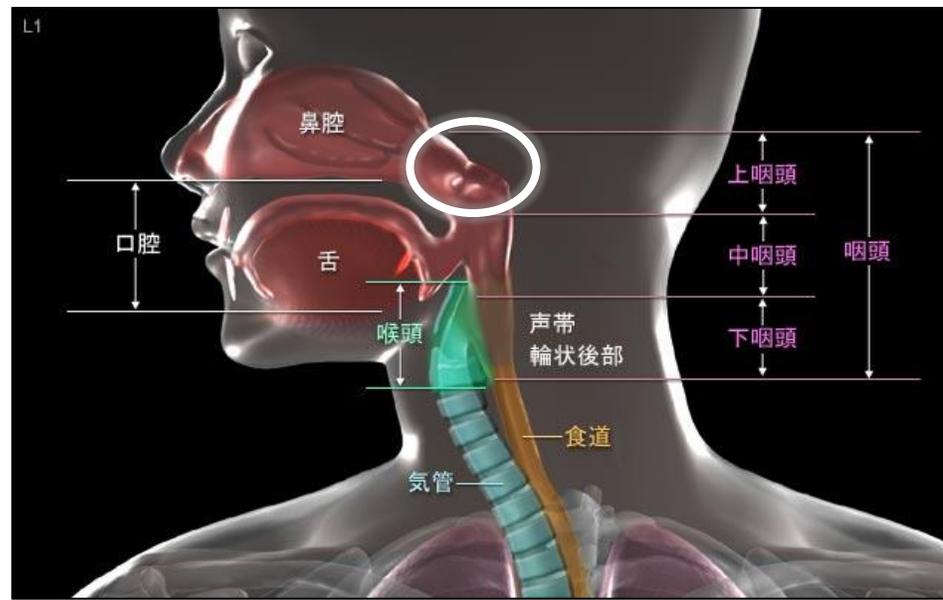
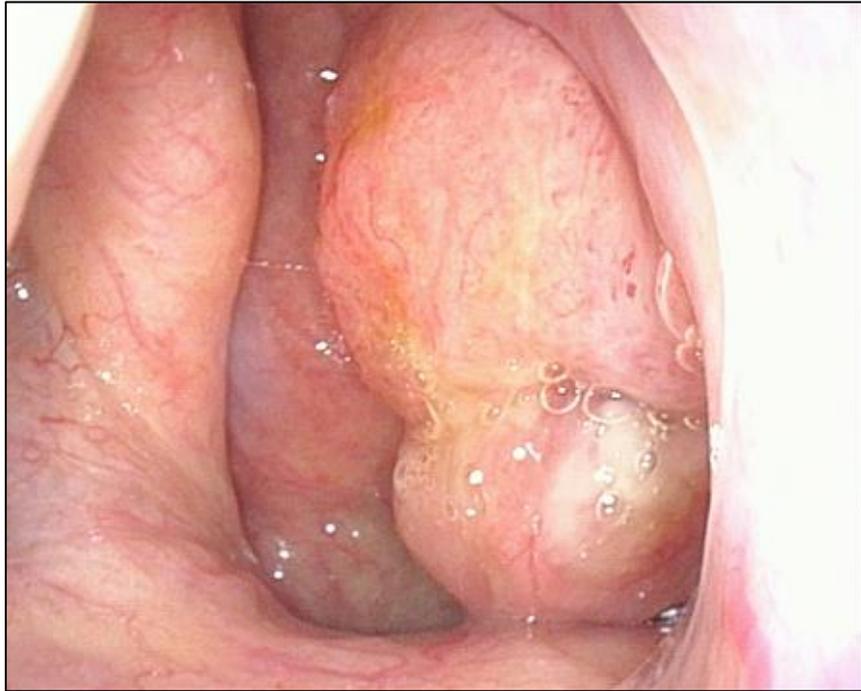
治療成績(生存曲線)



5年生存率 (95%信頼区間)

0.838 (0.708-0.913)

上咽頭がん

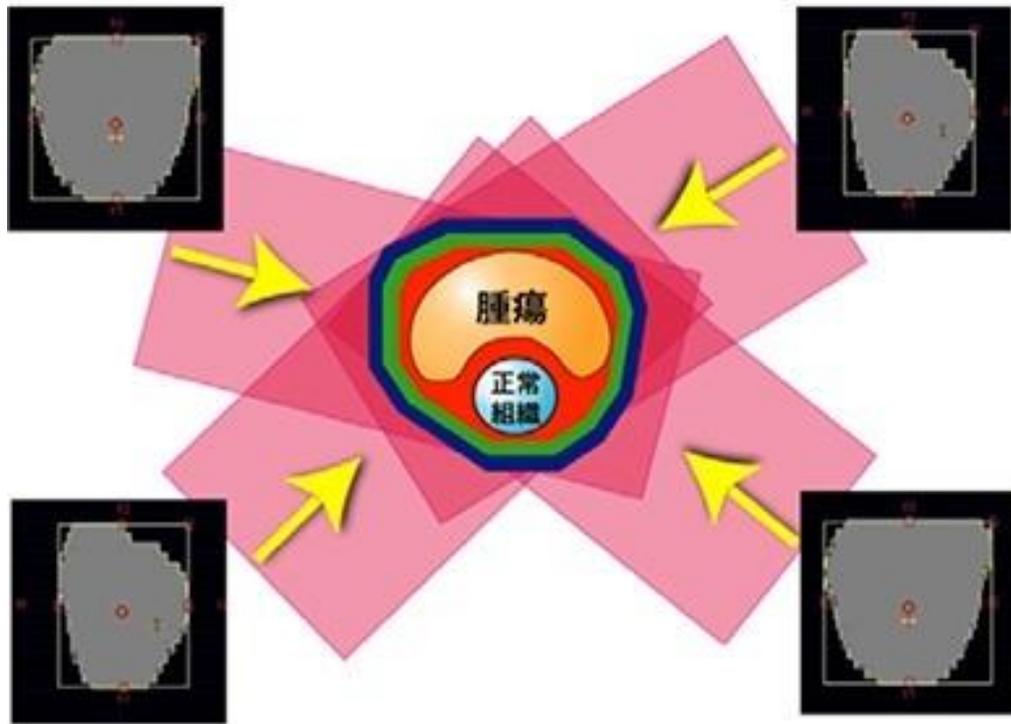




放射線 / 放射線化学療法

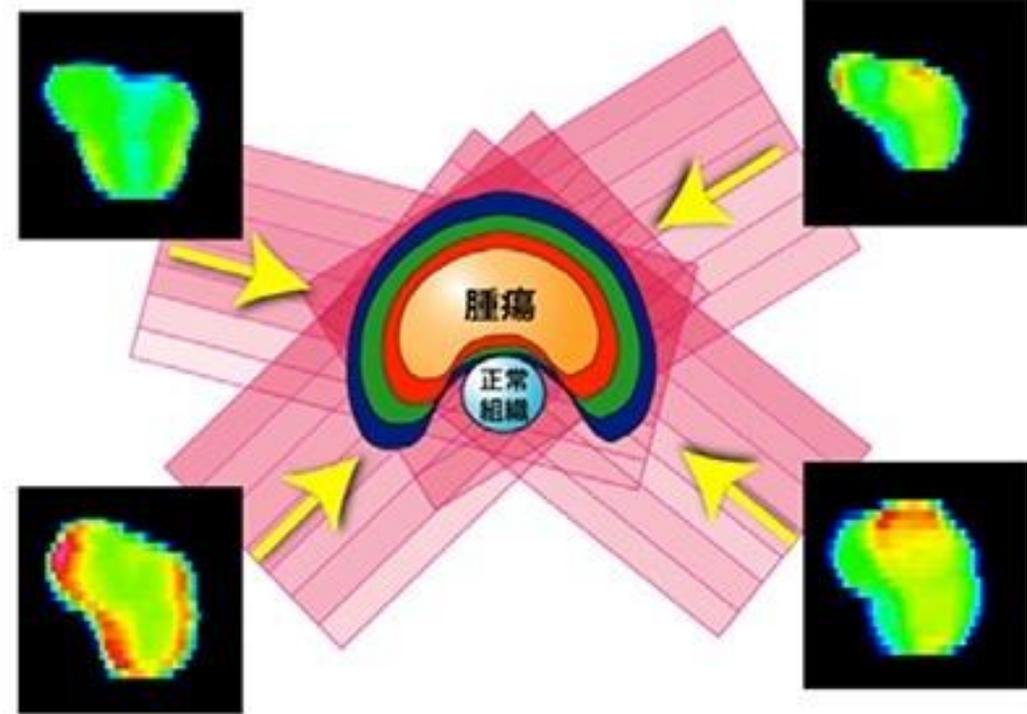
放射線感受性が高い、解剖学的に手術が困難

2016年10月～IMRT、治療機械増設(1台→2台)



従来の放射線治療

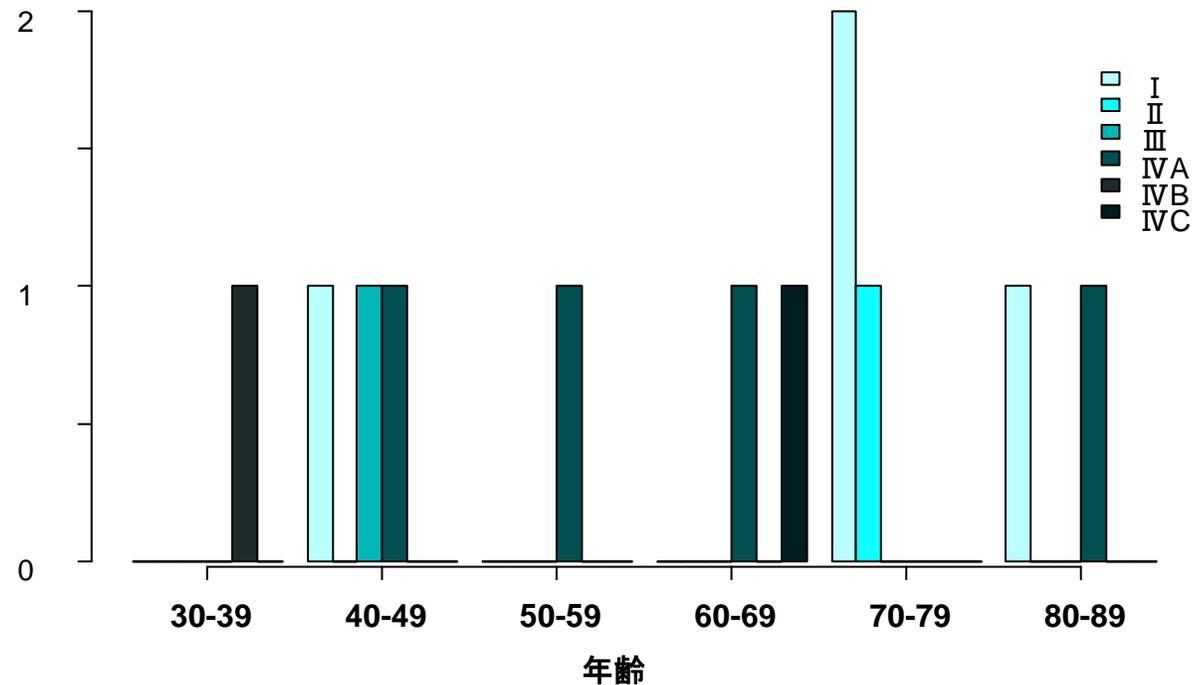
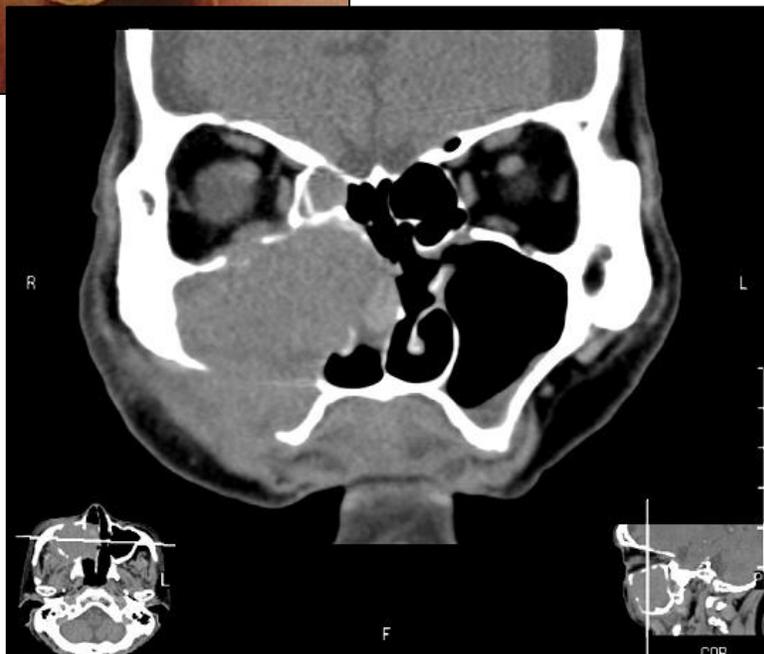
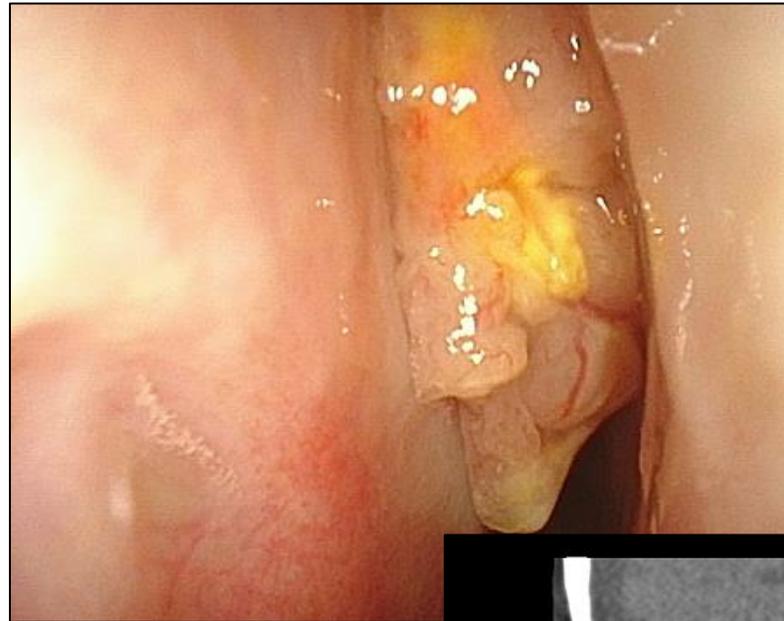
腫瘍にも正常組織にも同じ量の放射線が照射されてしまう



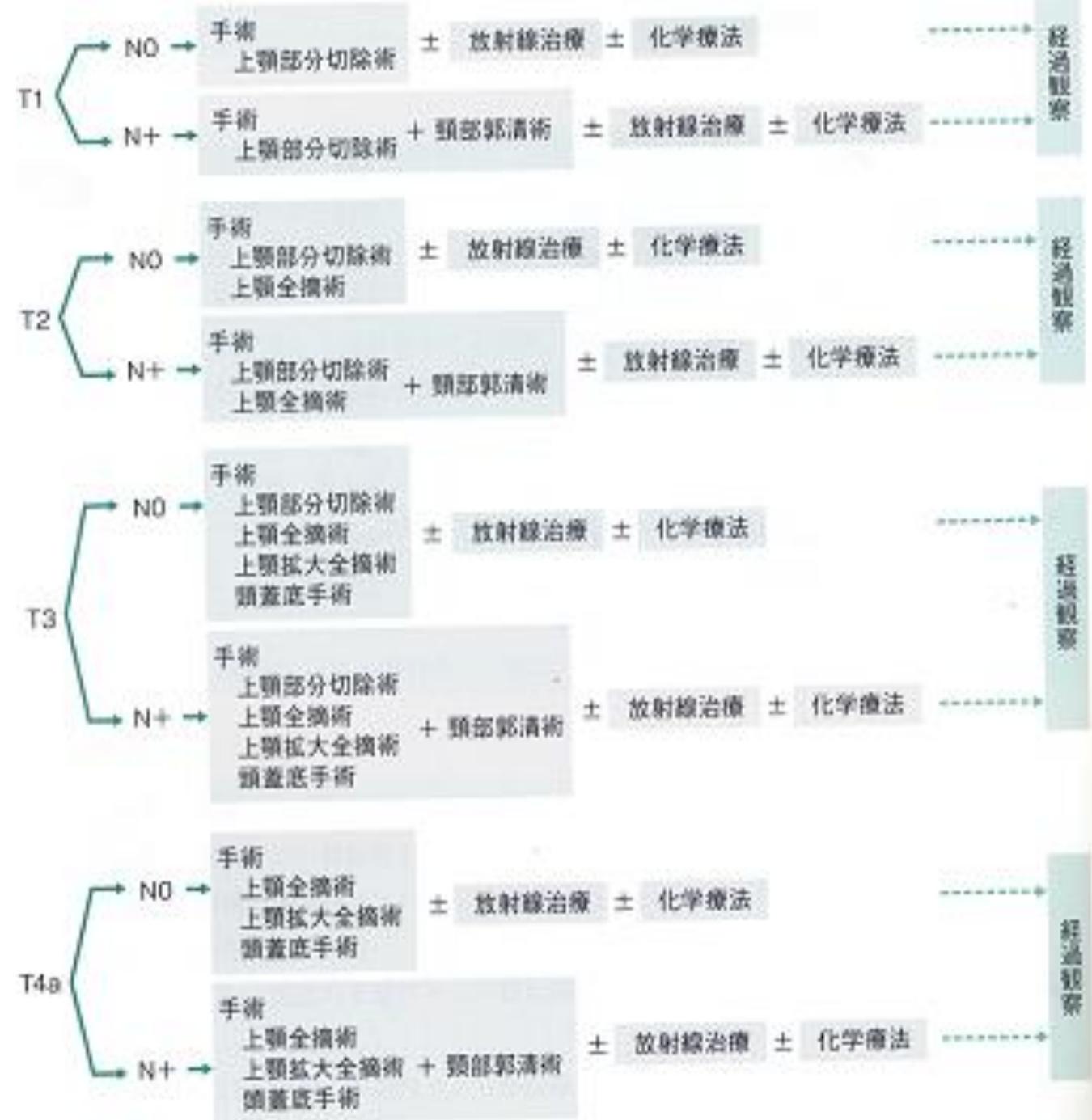
強度変調放射線治療(IMRT)

腫瘍形状に合わせた線量の集中と正常組織を避けた照射が可能

鼻副鼻腔がん



扁平上皮癌	7
腺癌	2
嗅神経芽細胞腫	1
神経内分泌癌	1
腺様嚢胞癌	1



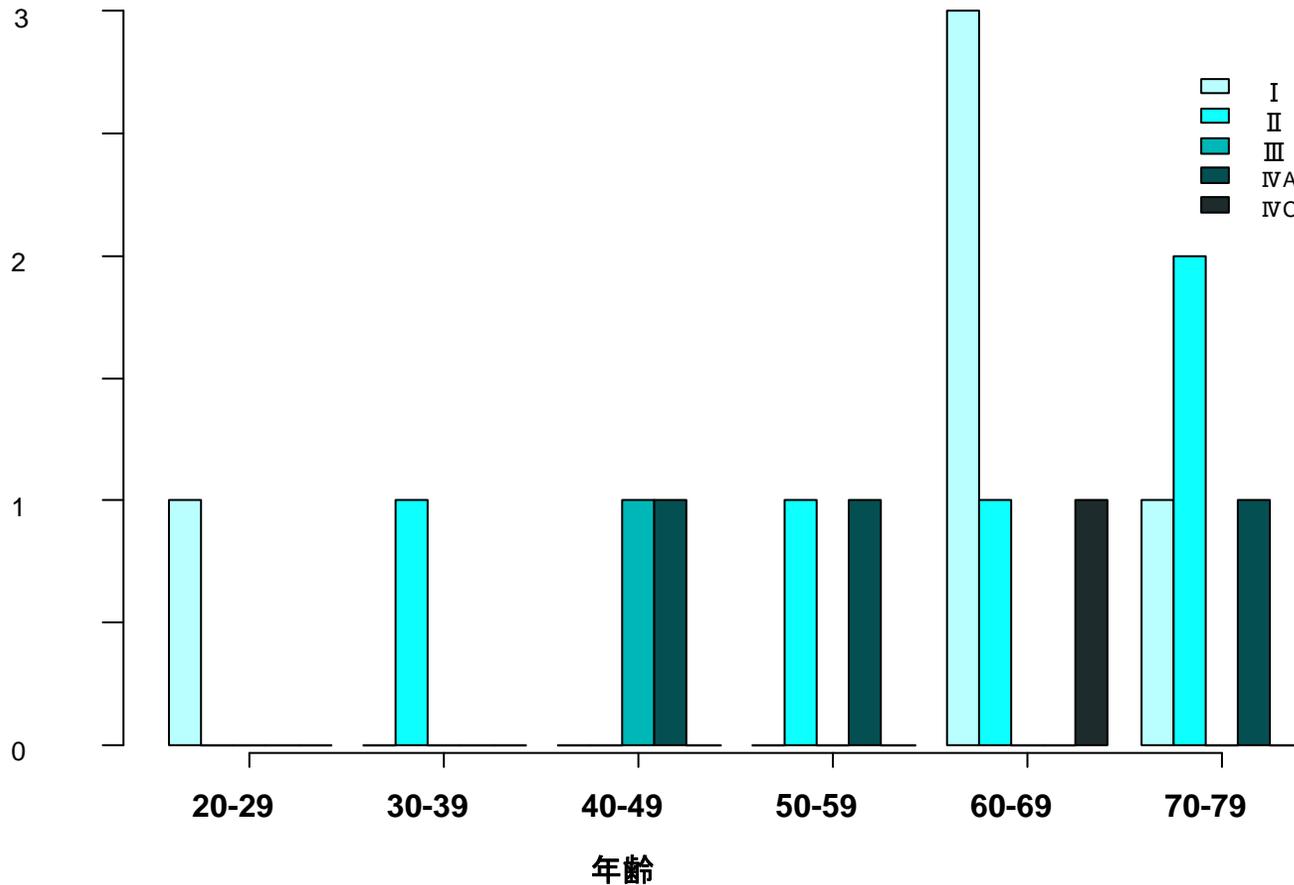
動注+放射線→手術	4
手術→放射線	3
手術	2
動注+放射線	1
放射線化学療法	1
重粒子線	1

手術
+
放射線治療
+
化学療法

唾液腺がん

耳下腺10例

顎下腺5例



腺房細胞癌	3
唾液腺導管	3
腺様嚢胞癌	2
粘表皮癌	2
扁平上皮癌	2
基底細胞腺癌	1
オンコサイト癌	1
上皮筋上皮癌	1

手術を中心とした治療

その他のがん

- ・外耳道がん 7例
- ・副咽頭原発扁平上皮癌 1例

BSC症例

- ・21例
- ・男性14例 女性7例
- ・年齢 65歳～96歳(中央値83歳)

まとめ

- ・各部位の特徴
- ・各部位の治療法の選択と治療成績